

経営者のための悟りリテラシー講座

悟りの智慧の社会実装の時代へ

内海昭徳

## はじめに

本書を手にとって頂いてどうもありがとうございます。

経営やビジネスの世界と「悟りの世界」というものは、これまでほとんど、関連づけて語られることはなかったと思います。

書店のビジネス書籍のコーナーに行けば、経営の実務面やマネジメント、戦略に関わるもの等や、組織論やマインドのあり方に関するものが主体です。

一方、悟りの世界は仏教などの宗教書や精神世界のコーナーでは多く目にすると思いますが、ビジネス書としての部類に入るものはまず見かけないのではないのでしょうか。

本書はビジネス書というわけではありませんが、悟りの世界と経営・ビジネスの世界との橋渡しのきっかけになることを企図して執筆しています。

世の中には情報リテラシー、金融リテラシーやメディアリテラシーといった言葉がありますが、私はこれからの時代、悟りの世界、悟りの智慧のリテラシーというものは、重要度を増してくると共に、少しずつ着実に市民権を得ていくものと考えています。

本書では「悟りリテラシー」と呼んでいます。何か特定の学びや教え、修行などをお伝えするものではなく、包括的に悟りの世界のエッセンスを素描しています。

私自身はかれこれ十五年以上、こういった世界を深めると同時に、講座やセミナー、講演、シンポジウム、個人セッションやコンサル、研修、リトリートなどを開催してきました。それらは主に对个人向けのものとして、関心を持っていただいた方にお伝えしてきたものですが、二〇二一年を迎え、資本主義社会の中で、法人が、組織全体で共有できる時代、ま

たそうすべき時代に明確に入ってきたと考えています。

私は、悟りの智慧を取り入れた法人、企業体の方が、コロナ以後のVUCA時代により適応した変化を創りやすくなっていくと思っています。

また、結論めいたことを先取りしますと、本来、日本の文化文明と悟りの世界との親和性はたいへん高く、実は日本人にとって、悟りの社会実装というのは、すんなり馴染みやすいものだというように理解しています。

だからこそ日本ならではの役割もあると思いますし、資本主義社会の中心で社会を牽引する企業経営者が、「経済活動（お金）と悟り」という、ある意味で俗と聖とも言える両面を統合していくことは、パラダイム転換という点で、大きな意味を持つてくるでしょう。

ちなみに本書は、私が実際に東証の上場企業で全社研修をずっとさせて頂いている中の講義内容も随所に含んでいます。

場で直接話す時の方が当然ながら共有はしやすいのですが、参考書籍的に、こういう内容の本があったらいいのと思いつつも、実際には世の中に特に見当たらないので、自分で書

くことにした、というのもひとつの背景です。

聞きなれない単語も出てくるかもしれませんが、平易な表現に置き換えてその意味するところの核となる概念を掴めるようにしたつもりです。

主には経営者層の方を意識して書いていますが、個人事業主や会社員の方を始め、自分の人生経営という意味では、どなたにでも当てはまる場所もありますので、ぜひお気軽に読み進めてみて下さい。

第四章までは、まずは「悟りリテラシー」を共有するという本書の趣旨のために、現実的な話よりは、悟りの世界を解体して掴んでいくための本質論が主です。

第五章で悟りの世界と現実の接続となり、概説的に要点を押さえていくことになります。悟りとは何か、という本質論を通過してからでないで、その応用編としての内容に進むのが中途半端になってしまうので、一つずつ悟りの扉を開いて行くような感じで読み進めて頂ければと思います。

ささやかながら本書をひとつの試論として、コロナ禍以後、凄まじい不可逆変化が加速する文明史的な転換期に求められてくる日本経済と企業組織の変容について、発展的な未来が開けていく一助になればと思います。

そして、本書を契機に、志を共にする方々とのご縁が結ばれ、経世済民の世を開くためのさらなる議論や実践をご一緒できることを、心から願っています。

令和三年（二〇二二年）一月二十日

内海昭徳

## 目次

はじめに…2

序章…12

wisdom2.0@サンフランシスコ 12

企業が悟りを語るなんて 15

「悟りって怪しそう」 18

「あなたは悟ってるの？」 21

「それは『科学的』なのか」 25

「資本主義、欲望、お金」 28

「私なんかにはとてもとても…」 30

「私はエゴのままで楽しい」 32

ティールを超えて 35

第一章：42

宇宙が消えたとき ー五蘊皆空ー

分野横断で見えてくる扇の要 42

三つの般若（慧） 44

言葉の先にある「概念認識」 48

「空」を語るときの落とし穴 52

色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊 57

ひたすら、無い無い無い： 62

すべてはひとつ、という共通認識 68

「顛倒夢想」に隠れた智慧 73

第二章：75

自在ということ ー不二不三ー

二〇一八年秋、SAND@サンノゼ 75

相対と絶対 79

悟りのレジリエンス 84

ドクサとドグマ 90

太極と陰陽五行 94

意志の始原をどこに置くのか 99

第三章：104

自分の宇宙を再創造する ー自生自滅ー

動的平衡と「無我」 104

五次元宇宙が常識の時代 110

視覚のスペックを超えて 113

アナログVRと環世界 117

量子宇宙と第一観測者問題 121

「意識」と情報場の影響 128

自分の意志で再創造する自分の宇宙 133

#### 第四章： 137

むすんで、ひらいて 天門開闢

上海の思い出とタオの真髄 137

「門」の悟り 141

内と外の同時反転という造化の理 147

ゼロと無限大の数理 152

ひとつの山、ひとつの頂上 158

わらべ唄と真理の遊び心 163

#### 第五章： 168

経営者の歩む悟道 入麿垂手

ダマヌールと縄文 168

全集中、宇宙の呼吸。一の型、螺旋。 173

日本の「間と結びの悟り」 178

「決める」力、意志決定能力の進化 184

「間」の律動と創発、時間の量子化 189

悟りの智慧を「自分ごと」に具体化する 194

企業活動は「関係性の悟り」を深める最高の場 199

公心（おおよげごころ）と経世済民の砦 203

おわりに 凡夫の心： 208

## 序章

### ◇ wisdom2.0@サンフランシスコ

日本で悟りの智慧を企業に実装することについて私が関心を高めたきっかけの一つは、二〇一八年にアメリカのサンフランシスコで開催されたカンファレンスに参加したことでした。

世界最大のマインドフルネス系カンファレンスと言われる wisdom2.0 でエントリースピーカーとしてスピーチする機会を得ることができ、仲間と共に準備して、拙いながらも英語でスピーチしてきました。

wisdom2.0 は既に二〇〇九年から開催され、ここでは、科学・テクノロジーの進化に伴う人間の意識や精神、存在意義の本質はどうあるべきかという時代的なテーマについて、様々な wisdom (智慧・叡智) が、多くのスピーカーによって語られます。

シリコンバレーのお膝元らしく、Google や Facebook の幹部層を始め、多くの経営者、研究者、指導者などが世界三十カ国から一堂に会します。

自由闊達な雰囲気の中で、三千人に上る参加者が繋がり合い、お互いの取り組みからインスパイアされるような、まさしく wisdom の世界的プラットフォームのような場でした。

私は wisdom2.0 をきっかけに、パロアルトやサンフランシスコで 1day ワークショップを開催することができ、Google のマネージャーや、宇宙の始原の仕組みに関心を持つオックスフォード大学院卒の組織コンサルの経営者等との素晴らしい交流の機会を得ました。

また同じ年の秋、サンノゼで開催された SAND (Science and Non Duality) というカンファレンスに参加したり、翌二〇一九年の秋に、パロアルトで開催された Trans Tech

Conference に出展する企業のサポートとして参画する機会があり、アメリカ西海岸での潮流を肌で感じる事ができました。

それら一連の経験から、悟りの智慧を多角的に解き明かしながら、個人、組織、社会の変容に実用性をもって実装していく流れは、次第に大きく広がっていくだろうという実感がありました。

ビッグテックをはじめとするベイエリアの企業群については、色々と話題性に事欠きませんが、当面の間、世界の先端産業やシステムを牽引していくことは間違いないと思います。AI開発を筆頭とする科学・テクノロジーの進化が止まることはないとしたら、シンギュラリティ問題を取り上げるまでもなく、「人間の本质、人間のあり方」という命題に、大きく振り子を振らざるをえません。

科学が脳や意識、宇宙の仕組みに深く切り込み続け、テクノロジーが人の意識や行動様式、人生の隅々に入り込み、はては人間の存在意義そのものへの介入度合いまでを深めていく

とき、私たちはどんな智慧をもって、生きる中心軸を整えていけば良いのでしょうか。

二十世紀初頭の歴史の歩みもいくばくか進んだこの時節で、数千年前から連綿と連なる先人の深い叡智を真摯に省みて、それらを現代の智慧と融合させつつ、さらに未来に向けてアップデートしていく、という取り組みは、既に時代の要請になっていると思います。

#### ◇企業が悟りを語るなんて

その際のシンプルなキーワードの一つが「悟り」になると思いますが、それとても既に、個人の悟りを探求するような段階ではなく、組織としていかに悟りの智慧を共有し活用できるか、ということが時代の潮流になって行くと思います。

それはまた、内的な本質論の学びにとどまらず、前述のように、お金が絡む経済活動の真つ只中での悟りの実装、ということも意味します。



とはいえ実際のところ、瞑想という一つの習慣や方法ですら、職場にすつと取り入れるにはまだまだ心理的な抵抗があったり、社会の目が気になったりする日本企業の空気感の方が大多数というのが実情でしょう。そんな中で、そこからさらに進んで「企業に悟りを」となると、いろんな誤解や問題が付きまといかねません。

そこでまず、「悟り」という単語につきまとう問題について、以下、いくつかの視点から、簡単な整理をしておきたいと思います。

ちなみに率直なところ、本書で「悟りリテラシー」と銘打っているものの、「悟り」という言葉でなくても特に全然構いません。

むしろ、共有したい本質や目的はしっかり押さえたままで、より適した言葉や表現があれば、そちらの方が良いと思います。

「悟り」という言葉が連想させるイメージ、しかも人によって受け取り方にかなり幅があるこの言葉は、正直なところ、少々使いづらい言葉だとさえ思っています。

また、漢字の当て方も「覚り」あるいは「達り」という表記もあり、似たような意味合いで括られる言葉でいうと、意識変容、気づき、覚醒、次元上昇、英語で言えば Awakening や Enlightenment など、色々あります。

ゾーン体験やフロー状態というとまだしもハードルは低いかもかもしれませんが、ビジネスシーンでこういったことに言及しようと思えば、単語表現を何かしら工夫しなければいけないという、ある意味で余計な配慮も、当面は必要かもしれません。

そういった事情を踏まえながらも結局、やはり「悟り」という言葉が含み持つ本意が、本書で皆さんと共有したい概念を表すのに一番わかりやすく良いと思ひ、この言葉を使うことにしています。

本書を手にとってくださいなさっている方は、「悟り」という言葉に、おそらく前向きなイメージを持っていると思います。

しかし社会一般的には、身の回りで普段「悟り」という言葉を使うことが当然のように受

け入れられ、日常会話に出てきたりするかというと、そうではないでしょう。特に企業の仕事の現場で「悟り、悟り」と普通に使ったら、まだまだ変な目で見られると思います。

そういう社会の空気になっている理由はいくつか考えられますので、序章では以下、代表的なものを踏まえておきましょう。同時に、それぞれについて本書での見解も示しておきます。

#### ◇「悟りって怪しそう」

① 悟りといえば、宗教や精神世界の系統の人が扱うもので、どことなく怪しいイメージがある。ある世代以上の日本人は新興宗教が起こした事件の記憶などもあり、組織で悟りの世界に関心を抱くことの拒絶感がある。ましてや企業や経営者が悟りを公言して語るのは社会的リスクや風評被害も負いかねない。

これはどうしてもつきまとう問題だと思います。ですから、個人的に関心を持つ人は増えている時流はあっても、悟りの世界が企業組織に全社的に共有されるリテラシーとなるのは、実際まだまだ簡単ではないでしょう。

一方、後でも触れますが、例えばアメリカ西海岸、ベイエリアの経営者や大学の研究者などは、一般論としてそういった社会的印象があることは当然ながら承知の上で、悟りの学術的な研究や自社への活用の可能性を非常に貪欲に探求しています。

私の友人知人で俗に日本のトップクラスと呼ばれる大学の研究者たちも、悟りの概念と  
いうものを含みもった上で、様々な学術研究に取り組んでいます。

A Iを中心としたテクノロジーの開発と意識科学の結びつきもあり、むしろ大学の理工系の先端研究者にとって、悟りの世界はもはや馴染みのある領域とも言える状況になっている感があります。

またマインドフルネスの広がりやティールの組織論の柱とも言えるインテグラル理論を見て、その本質は悟りの世界と決して切つてきれないものです。

近年の意識変容や組織変容の潮流を煮詰めていくと、結局のところ悟りの精髓と向き合わざるを得ないと思いますし、経営者の中には、関心は高いけれど表立ってダイレクトには口にしない、という方も多いのではないかと思っています。

しかし、そうであるなら、その精髓を早く取り入れて、時代の先端を開く立ち位置を選ぶ、という選択肢は、ひとつの賢明な方向性ではないかと思うのです。

イノベーター理論で有名なスタンフォード大学のエベレット・M・ロジャースの分類では次のように整理されていますが、「企業に悟りを」という趣旨に共感し踏み込む方は、一イノベーター…革新者のポジションになると思います。

- 一. イノベーター (Innovators) : 革新者
- 二. アーリーアダプター (Early Adopters) : 初期採用層

- 三. アーリーマジョリティ (Early Majority) : 前期追随層
- 四. レイトマジョリティ (Late Majority) : 後期追随層
- 五. ラガード (Laggards) : 遅滞層

◇「あなたは悟ってるの？」

② 悟りを語り、それを活かすなら、そもそも自分が悟っていないとできない

これはもちろん一理ありますし、人生をかけて真摯に悟りの道を探求し、修行されている方などからすれば、軽々しく悟りの智慧などと語るな、と言いたくなるかもしれません。

例えば厳しいお寺のように、一日二十四時間の自分のあり方を根本から整え、何年、何十年にも及ぶ修行や修養を重ね、自分が到達した境地から、ようやく少しずつ悟りを人に説く

べきだ、という考え方があるとして、それは伝統的な枠組みからすれば本筋だと思っています。そうなる私も、こんな本を書く資格があるのかと問いただされるかもしれませんが、私は私なりに到達した道と、私なりの考え方と目的で、この本を書いています。

そもそも論としていうと、悟った、悟っていないという実証や議論自体は袋小路に入りやすいむつかしさがあり、悟った人、という合意自体を客観的に整理したり明らかにしきれものなのかどうかは、まだまだこれからのテーマです。

近年は、科学や学術の視点から、脳神経や脳内ホルモン、脳波や血流の状態の変化などから、悟ったと言われる悟り経験者の共通項を客観化するような専門研究も見聞きします。

そういった研究はどんどん深まっていくと思いますが、本書はそういった研究書ではありませんし、悟りに至る道や方法論を伝えるものではありません。

個人的に悟りや覚醒を求めて研鑽を重ねることは、それはそれでももちろん素晴らしいと

思います。本書は悟りを目的としての議論がしたいものでもありません。

あくまでも、言語表現と論理の道筋が示す概念によって、共有可能な「悟りリテラシー」を向上させ、それを企業に実装し、実社会に活かす道を見出すことを目的としています。

また、悟りの経験や覚醒体験と呼ばれるものは、どうしてもその人の属人的な主観の領域を超えるのがむつかしいため、誰か特定の人の悟りを万人共通のものにしようとする、その妥当性には疑問符がつきまといまいます。

結果として、どんなにある優れた方法論の効果や再現性を追求したとしても、その方法論が万能の如く社会に受け入れられるかはまた別の話となります。

当然ながら人によって向き不向き、好き嫌いもありますし、ある集団内では浸透しているとしても、外から見たら受け入れがたくなったりすることもあります。

シンプルに例えれば、何か一つの救世主的な教えの登場によって、あらゆる組織、全ての

人類がそれで覚醒する、などという映画のような事態はありえないでしょう。

私はむしろ逆に、多様な悟りの方法論や切り口があった方が、それらが寄り集まり、重なり合い、織り成しあうことができ、その多様性が相乗効果を生み進化を加速させると考えています。

そのための羅針盤として、人類社会においては、数千年に渡り様々な覚者と呼ばれる人や悟りの智慧の伝承があるのですから、素直にそこを紐解き、さらに深めて発展させることが、まずもって取り組みやすいところではないでしょうか。

そうして、はじめに、でお伝えしたように、「何か特定の学びや教え、修行などをお伝えするものではなく、包括的に悟りの世界の共通のエッセンスを素描する」とした方が、企業としては受け入れやすいと思います。

そしてその上で、あるいはそれと同時並行で、個人それぞれ自分に合った個別の悟りの道を探してみられるのが良い、というのが、私のスタンスです。

ですから本書の内容の主眼は、悟りの智慧のエッセンスを共通概念として掴み、企業に実装し、社会に役立てる可能性を押し開くことに置いているのです。

とはいえそれでも、本書での悟りの解釈自体も著者の特定の主観だろう、という指摘があれば、論理的には、それは当然その通りですね、ということになります。

ですから本書をひとつの試論として頂きたい、ということを受け止めて下さい。

#### ◇「それは『科学的』なのか」

### ③ 悟りは、科学のような反証性、再現性に欠け、非科学的で受け入れがたい

それは科学なのか、哲学なのかという問い、あるいは科学と宗教、科学とスピリチュアリティの統合はいかにして可能なのか、という問いに、誰もが簡単に納得できる答えを提示す

ることは容易ではありません。

脳神経科学を筆頭に、悟りを科学的に解き明かそうと試みるような研究は今後さらに進んでいくと思いますが、多くの専門的知見を必要とする、分野横断的な大変なテーマになるでしょう。

ここでは、細かな議論に踏み込む代わりに、そもそも「科学とはどういうものなのか」という問いについて、ひとつの見解を引用しておきたいと思います。

イタリアの物理学者のカルロ・ロヴェッリの言葉です。

「科学が信用に値するのは、科学が「確実な答え」を教えてくれるからではなく、「現時点における最良の答え」を教えてくれるからである。

私たちは科学をとおして、差し当たつての最適解を手に入れる。

科学という鏡には、様々な問題と向き合うための最良の方法が映し出されている。

科学はつねに、知に再検討を加え、知を更新していこうとする。

こうした性格があるからこそ、私たちは科学を信じ、科学が「目下のところ利用可能な最良の解」を示していると判断できる。

もし、それよりさらに優れた解が見つければ、その新しい解が科学になる。

邦訳『すごい物理学講義』(P262)

科学とは、という問いに対して、現代物理学界を代表するロヴェッリのこの姿勢が私にはとてもしっくりくるのですが、いかがでしょうか。

悟りを科学し、それを社会実装する、という姿勢もまた、柔軟に、このようなものであって良いのではないかと思います。

社会に役立てるための知を更新していく上では、理系、文系の垣根もなく、「目下のところ利用可能な最良の解」を深め続けることが、今後、より大切になります。

また、アカデミズムの学術的な専門家だけでなく、民間の多様な研究者や実践者、経営者、プラクティカルリーダーなどとの、様々な掛け算が有効になるでしょう。

そうして、悟りの智慧を深めることを共に「楽しむ」という姿勢が、より発展的な未来に

つながって行くと思います。

◇「資本主義、欲望、お金」

④ 悟りは現実社会から離れていて、資本主義の中で役立てられるものとは思にくい

これは、特に、厳格な悟りの探求者について言えば、やはりその通りだと思います。私がこれまでに出会った人の中でも、この現代社会ではちょっと考えられないような修行、人によっては精神錯乱を起こすレベルのことをされている方もいました。

一方で前述の通り、悟りをより客観的に、学術的に、実用的に捉えて、現実社会に活かそうとしている人々は着実に増えています。

また例えば、資本主義社会の経済活動、企業の売り上げ、お金の論理、といったことは世俗的なことで、悟りというものは人間の欲望や損得勘定が絡むビジネスの世界から超然としたものであるべきだ、というのは、ひとつの見解としてあるかもしれませんが。

しかし、コロナ禍以後の経済崩落と、それに伴い仕事、収入、生活、人生が激しく不安定になり苦しい状況に置かれる人が激増している状況を見れば、お金を豊かに循環させられることは現実社会において何より大事で、本来であれば富の創造と循環を起こす企業の取り組みは最大の社会貢献でしょう。

第五章で触れますが、お金は人の命、人の人生、人の生きがいと直結する側面を持つものである以上、「経営者の悟道」というものが、本来はずっと必要だったのではないかとさえ思うのです。

もちろん実業自体はそんな綺麗事ではすまないことが多々あるとしても、少なくとも経営者の意識変容がより高みに行くほどに、経済社会もより豊かに幸せに満ちたものになっ

ていく可能性は多いにありますが。

そうならば、悟りリテラシーの向上を通して小欲ではなく大欲を有した経営者が何らかの新たな智慧を経済活動に反映させることは、資本主義社会のパラダイム転換を考える上で大いに意義のあることでしょう。

◇「私なんかにはとてもとても…」

⑤ なにやら高尚で私には縁遠い。

「悟りなんて高尚で、お釈迦さまみたいに特別な人が得たものなのだから、私なんかには縁遠い世界です。」

悟りについて、こういう素朴な心情を聞く機会が私はしばしばありました。また、普通に

日々を生きていて、悟りたい、と心から本気で思い、そのための実践をずっと継続する人はほとんどいないと思います。

欲をおさめ、自我を抑え、静かに真理の探究へと精進しているようなイメージで悟りの世界を捉えたら、自分の日常生活とは全く繋がらないでしょう。

ましてや日々、刻々と、大小いろいろな業務に忙殺される企業活動の中では、悠長に悟りを探求しているヒマなどありません。

これらについては、「悟りをどう捉えるか」ということについて、視座の違い、というポイントで考えておきましょう。

私は、悟りの世界は良い意味で、もっと世俗的、一般的であって良いと思っています。

理由はシンプルで、悟りの智慧があった方が、人生のいろんな局面で大いに役に立ちますし、より良い人生を送るための貴重なツールであることを実感しているからです。

抽象度の高い世界ではあるものの、普遍的であるがゆえに、汎用性はものすごく高いとい



う側面もあります。

ですから、高尚だとか低俗だという価値基準ではなく、身近な日々の暮らしや人生や社会を、より良いものにするものかどうか、という視座で捉えてみて頂きたいのです。

単純な結論としては私は、悟りの智慧があった方が、それがない生き方よりも、より人間として色々な面で幸せに豊かになりうると考えています。

ですから、悟りの探求は尊く高尚なものだという印象があるとして、それはそれで理解できませんが、それとは別に、悟りは自分と社会にどんな価値をもたらしうるか、という視座を重視してみて頂きたいのです。

◇「私はエゴのまま楽しい」

⑥ 別に悟りたいと思わない。今のままで十分だしエゴでも楽しい。

こういう観点に対してはまず、率直に言って、それならそれでも全然良いと思います、というのが大前提の私の見解です。

その人の日常や人生観、死生観の中に、悟りというものが入り込む余地がほとんどないならば、何に価値を見出し、何を楽しいと思うかは、その人の自由意志でしょう。

もちろん、エゴがもたらす問題が多発して、自分を苦しめたり人や社会に迷惑をかけるようなことがあれば問題ですが、だからと言ってその人に即、悟りが必要だということになる訳でもありません。

悟りに限らず、人にはそれぞれの学びの内容や人生のステージがあると思いますので、基本的にその人のその時々々の選択や課題を尊重するべきだと思います。

一方で、発達心理学やマズローの欲求段階説、あるいは禅の悟りの階梯に見られるように、人間の意識や精神には、ある程度段階的に整理区分できるような、階層というものがありません。

ひとつ大事なことは、段階が上がったから優れているとか進化している、というわけではないことです。段階が上がっても、それ以前の段階は内包していますし、時にそこに下りたり戻ったりすることもあります。

言葉を変えるなら、意識の段階が進み拡張されると合わせて、多様な段階を自在に行き来する自由度が上がる、と言えると思います。

エゴの世界や人間の本能的欲求の世界にはもちろんその階層での楽しみも価値もありますが、そこにずっと留まらず、それだけではない世界を少しずつ、開いてみる。

そうするとそこに、もつと奥深く味わい深い楽しみや喜び、より奥底からの生きがいが見出せてくるかもしれません。

単純に考えても、自分のエゴの喜びのためだけに生きるより、大切な人や周りの人が笑顔になり、その喜びを共有できる方が、心の充足感が高まると思います。

そういう意味からも、悟りの智慧は、より自由に自在に、自分の心の器を大きく広げ、生きる価値を豊かに充実させてくれる、最善のツールとも言えるでしょう。

#### ◇ティールを超えて

では、悟りにまつわるこういった旧来的な見方がひとまず解かれていったとして、悟りと企業の接点について一つ触れて、本章を終えたいと思います。

企業経営、あるいは経営者の役割と悟りの智慧とがどのようにカチツと噛み合って最良の効果を発揮していくのかについては、何しろ適当な先例と呼べるものが過去の歴史に見当たらないので、確証的なことが言えるわけではありません。

しかし、悟りの智慧が持つ「汎用性の高さ」というものは私自身、自分の人生経験としても、それを共有した仲間や人々、組織のありようを見ても、確実にオススメできるものです。

だからこそ企業組織と経営者がそれを実装することを目下のミッションとしているのですが、ひとくちに経営者と言っても、会社の規模も違えば役割も違い、また会社ごとの特質も当然ながら全く異なります。

実際は、本書でこのあと共有する悟りリテラシーの5つの柱を中心に、どのような視点、どのような角度でそれぞれの企業に役立てられるかは、都度、創意性をもって時流と共に生み出していくことになるでしょう。

その前提で、一言及しておきたいことは、近年、組織経営に携わる人であれば程度の差こそあれ誰もが意識したであろう、テイル組織論についてです。

テイルの英語原著は二〇一四年、日本語版は二〇一八年一月に発行で、二〇一八年はいろんなところで話題になっているのを見聞きました。が、その後日本でテイル型組織の社会実装はどれくらい、どのように進んでいるのかについては、本の注目度の高さ比べて、低調な印象があります。

二〇二〇年は特にコロナ問題の対応に揺れに揺れた一年だったこともあり、ビジネス書で話題になるものを見ることもありませんでしたが、テイルの本が撒いた種は、日本の経営シーンの中でだいぶ埋まってはいるのではないかと私は思っています。

実際は本の分量も多く、内容も多岐に渡るため、全体を消化しづらい面もあり、部分的な参考にするくらいにとどまっているのかもしれない。

私としては、組織変容は構成員ひとり一人の意識変容があってこそ、と考えているので、テイルの組織論と合わせた意識変容のメソッドや方法論について、企業の経営者や人事

担当の人々がどんな議論をしていたのかという点に関心があります。

ティールのような自律的な生命組織モデルは、一つの組織論の理想として理解はできて、実際に組織に浸み込ませることはむづかしいだろうと思うのです。

なぜなら、外形としてのシステムの組織論とは別に、ティールの鍵は、結局一人ひとりの意識の変容にかかってくるために、実際には学び、気づき、主体的な変容を継続発展させる必要があります。

けれども、それを元々の企業理念やビジョンとも調和させながら、全体として認識と歩調を合わせることにリソースを割きつづけるような手間は、普通、かけたくないと思うのではないのでしょうか。

社内での共通の研修や学びの場を継続したからと言って、資本主義の効率性のモノサシから見た数字業績に、即時反映されるかどうか分かりません。

企業体である以上、基本的には業績を出せなければそもそも存在意義がありませんが、

一方で、単に労働力の提供とその対価としての給与、といった契約関係を越えた「非合理的価値」が、組織の見えざる力であったりします。

それは会社への帰属意識だったり、誇りだったり、仲間との絆や信頼だったり、ひいては自らの「生きがい」と結びつくものになります。そして、その組織において人生を送る自身自身の人生観、死生観というものにまで繋がってくるものでしょう。

そういうことも踏まえると、「組織は人なり」との格言の通り、組織変容には個々の意識変容が直接的に、そして密接に繋がってきますし、もう一步踏み込んだところで言うならば、やはりトップの意識変容が構成メンバーの意識変容、ひいては組織全体の変容をもたらす最大のファクターである、と言えると思います。

リーダーの器が組織の器を決める、ということとは、一般論としても、私の実体験としても、経験則的にほとんど疑いようのない事実です。

そこで、リーダーの器、あるいは人の器、ということを考えてとき、意識の発達段階の先

を、テイルではどのように見据えているのでしょうか。

『テイル組織』の中で「付録②テイルを超えて」という一節にある「統一意識」についての次の言及は、充分に注目に値するでしょう。

「(略) 大半の精神的な伝承や神秘的な伝承は、私たちの意識が絶対的なもの(「神」「完全性」「全存在の基礎」「虚無」などさまざまな表現で言及される)と融合するときに、そのような終着点(それは当然全く新しい何かの出発点だと思われる)が現れると考えているようだ。

(中略) 統一意識は悟りであり、明瞭な見通しと深い思いやりを持っている。さまざまな伝承の中でこの段階に到達した人々の物語は、彼らが二元性を完全に超越していることを示している。

(中略) 時間の制約の中にも、無限の中にも生きており、空間も時間もない視点から今ある現実を見ている。」

こう明記されているように、テイルを超えた組織、ということをご想定したとき、その一つの大切な要素が、ここでいう「統一意識」、つまりは悟りの領域になります。

であるなら、テイル的な組織を目指すにしろ、その先を目指すにしろ、「統一意識」や「悟り」という世界は、企業でもやはり射程に入れざるを得ないでしょう。

ビジネス書の世界的ベストセラーにこのような方向性が明示されているこの時代、悟りの智慧をリテラシーとして得るなら、その要諦はどのようなものなのか、そしてそれは、どのように新たなパラダイムの種となりえるのか、ということに、真正面から取り組む準備は、既に時代が整えてくれているのです。

もちろん悟りリテラシーを高めることの意味は単に組織論の話にとどまりませんが、一つの時流の象徴として踏まえておいた上で、ここから先、イノベーターたちの新たな道を、扉を開きながら解き明かしていくように進んでみたいと思います。

## 第一章

### 宇宙が消えたとき 一五蘊皆空一

#### ◇分野横断で見えてくる扇の要

ここから具体的な悟りの世界に踏み入る前に、一つ確認しておきたいことがあります。

悟りのリテラシーを共有していく上で、様々な言葉や表現が出てきます。全体的な傾向としては仏教的な単語が一番多く、第四章は老子の言葉が中核になりますので、東洋思想的な漢字、熟語がたくさん並んでいる印象になると思います。

そういうものを選んでいく理由は、その「言葉」が意味する「概念」を共有する上で、仏教や東洋思想はロジカルに説明しやすい性質があると私が考えているからです。

例えば第一章の「五蘊皆空」は、ご存知の方も多いと思いますが、般若心経の言葉です。

ほかにも科学や哲学、日本神道などの有用な単語や表現は随所に取り入れています。が、私自身も今、何か特定の分野や学び、組織や団体などに専従しているわけではなく、自社の事業としての研修などの内容も、古今東西の智慧を自分で総合的に組んだものになっています。

何か一つの特定分野、というよりは逆に、ここではこう表現され、それはこちらでこの概念に重なる、と言ったように、分野横断的に共通点や関連している点を紐付けながら、全体観としての整理体系化に取り組んでいます。

各分野に専従の専門家はもちろんいらっしゃいますので、より深く興味を惹かれるものがあれば、その追求を深めてみることをお勧めいたします。

自分に合ったものを何か一つをしっかき深めてみることは、とても大切なことだと思います。

どんな分野であっても、その本質に迫れば迫るほど、あらゆる事象の本質にある普遍的な真理というものに近づいていくと思いますし、そうすると逆に、他の分野に相通じる扇の要のような高次の視座が開けてきて、自分の認識のメタ（高次）化というものが実感されるでしょう。

#### ◇三つの般若（慧）

もう一つ、悟りを語るにあたって、仏教の様々な教えの研究・解説書に当たるアビダルマを参考に、考えておきたいことがあります。

仏教では求道の先に到達した智慧のことを指して「般若（慧）」と言いますが、アビダルマにおいては、生まれた後に得られる般若（慧）には次の三つがあるとされています。

一．聞所成慧（もんしよじょうえ）… 書籍や聴講など他人の教えによる智慧。

二．思所成慧（ししよじょうえ）… 思考や理論的推論など内的思索による智慧。

三．修所成慧（しゅしよじょうえ）… 修行や直接的なスピリチュアル経験による智慧。

ここでは書籍という性質上、アプローチ出来るのは、一の「聞所」が主となり、読み手それぞれを受け取り方の深さによって、二の「思所」の度合いが変わってくるかと思えます。

また二の「思所」は禅の公案のように、人間の普通の論理的思考では分からない謎かけのような問いの答えを思案する中で、忽然と悟りを得る道にも通じるでしょう。

現代的に言えば講座やセミナー、研修などの学びの場を活かした双方向での問答などは、一人で自問自答するよりも思索や気づきが深めやすくなるメリットがあると思います。

三の「修所」は大きく捉えると身体性を伴う修行やプラクティスになると思いますので、ここでは扱いませんが、素晴らしい効能がある一方で、なかなか難しい側面も伴います。通常、悟りを得た、というと、何か直接的な覚醒経験、スピリチュアル体験のようなもの

を連想するのが、一般的な印象ではないでしょうか。

何かしら特殊な意識変容の経験をした、というのは分かりやすくはあるのですが、それが必ずしも悟りを保証するものとは言えない側面がありますし、ひとくちに悟りといっても、その言葉が意味するものや、経験、境地は様々に異なります。

「修所」の智慧は体感や身体性での実感を伴うので本人にはわかりやすく、確信も持ちやすい側面はあると思いますが、修行による体感を求めることは逆に感覚への執着につながることもあり、良し悪しだと私は思っています。

なぜならこのあと触れていきますが、根源的な悟りの世界は、体感や感覚、身体性という次元の先にあるものだからです。

また、えてして、その体験をした人を特別視して、「悟った・悟っていない」という境界線意識と序列づくりがちである、という落とし穴があったりします。

さらに、覚醒体験をしたからといって、その後、現実の人生が良い方向に行くとも限りません。現実生活との折り合いやバランスをつけるのが難しくなり、スピリチュアルエマージエンシーに悩むケースもあつたりします。

瞑想や身体性を伴う行法は大切だと思いますが、そういった方法によって本格的に悟りを得心するには、相当集中できる環境と適切な指導者、修練の期間が必要になるでしょう。

それは少なくとも、企業組織が取り組むにはハードルが高すぎると思いますし、それらが悟り自体を主目的としているものであれば、前述したように本書の趣旨とは異なるものです。

一方で、呼吸法、ヨガ、心身鍛錬、様々な行法などはそれ自体素晴らしい効果はもちろんですし、結果として悟りにつながることもあるでしょうから、ご縁や興味があったものに何か取り組んでみることで自体は、とても大切だと思います。



一方で、いくら知識を蓄えたり経文を暗唱したり、悟ったと言われる人の講話を聞いたりしても、現象的なそれらの文字知識が上滑りしたら、浅いところの観念知識にとどまってしまう。

言葉や文字によって悟りの世界を直接的に伝えることは不可能、という禅の教えの通りで、「聞所」や「思所」による探求も、一筋縄では行きません。

こういったことを踏まえた上で、改めて本書で重視したいキーワードを確認しておきましょう。

それは、企業経営に、あるいは広く社会に悟りの智慧を実装するということを前提において、大切なことは、悟りの智慧の「概念」を自分のものとする、ということです。

#### ◇言葉の先にある「概念認識」

概念とは何か定義せよ、となると小難しい議論になると思うので、ここでは簡単に、「その言葉が指し示すもの」というくらいに捉えてもらえれば良いと思います。

例えば「バランスシート」という言葉が指し示す概念は、経営者であれば誰でも持ち合わせています。

しかし決算書を見たり会計を学んだりすることがなければ、その言葉と概念が紐づいてきません。その人の意識空間の中には、「バランスシート」という言葉が指し示すものは、概念として想起されないでしょう。

言葉は知っていても、概念が伴わなければほとんど意味はなく、単に知っているだけ、という意味での知識は実社会に活かすこともできません。

また、例えば私たち現代人は、宇宙空間に浮かぶ球体状の地球、という概念を持っていると思いますが、時代によっては亀の上に乗っている地球や、円状の平面的な地球の概念を持っていた人々もいたでしょう。

しかし、地球の外から地球を俯瞰することができるといふ地球儀というものを人類が得たときに、大航海時代のように、この地球上を自由に行き来できる概念が広がり、また、地球の外の空間に出て、宇宙空間すらも活用するという概念拡張が起きていきました。

何かの対象について、その言葉が指し示すものがより正確に精緻に鮮やかになればなるほど、それは実用的な可能性も高めていけるものになるのだと思います。

ここから推し進めてみると、悟りというものに対して自分の「概念認識」がより正確に精緻に鮮やかになることは、何らかの実用的な活用につながりうるのではないのでしょうか。

言語を道具とした概念の共有であれば、完全に一致することはないとしても、ある程度までは合わせて行けるでしょうし、それは思考や理論的推論を伴うので、地に足ついた形で一緒に進めることができます。

また、個人で探求するよりも、仲間や職場で折に触れてシェアしたり議論したりできるので、相互作用の中で、場によって「悟りリテラシー」を深める効果も期待できると思います。

悟りに限らず、日常の生活、日常の仕事、日常の人間関係の中で当然のように扱われる話題は、その人の意識に浸透し、それは場の波動を変化させ、自分の細胞、ひいては自分の人生にまで影響を及ぼしていきます。

そのため、悟りの智慧を企業組織に安定的に実装するとしたら、まずもって「概念認識」から始めることがベストだというのが、自分なりに長年あれこれ見聞きし経験してきた上で、私の結論です。

そして、「概念」が精緻化されると新しい「感覚」のようなものが開けることにもつながり、その感覚の先には、例えば将棋の「歩」がひっくり返って「金」に成るように、現象世界の認識全体が綺麗に反転して、

「成った。」

という、「成慧」の得心の世界そのものへと抜けうる可能性があるという風に考えています。

このあたりはどうしても抽象度の高い表現になってしまいますので、ひとまずここではこれくらいにして、第一章の柱となる言葉、「五蘊皆空」の概念を紐解きながら、進んで行くことにしましょう。

#### ◇「空」を語るときの落とし穴

さて、ようやくですが、本筋に入って参りましょう。第一章の柱となる四文字の概念は、「五蘊皆空」です。

まずこちらが般若心経の全文になります。

#### 摩訶般若波羅蜜多心経

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄  
舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是  
舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減  
是故空中 無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界 乃至無意識界  
無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道  
無智亦無得 以無所得故  
菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟  
涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提  
故知般若波羅蜜多 是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪 能除一切苦 真実不虛  
故説般若波羅蜜多呪 即説呪曰 羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩埵訶  
般若心経

「空(くう)」という言葉は、仏教の文脈で悟りを語る上では、まず間違いなく出てきます。般若心経を読んだことはなくとも、「色即是空、空即是色(しきそくぜくう、くうそくぜし

き)」という言葉は、どこかで見聞きしたことがある方は多いのではないのでしょうか。

あるいはその後に、「色不異空、空不異色」と続きますので、そこまでの理解を含めて、悟りの精髓は「空」にあり、また「色と空は違うものではなく同じものなのだ。」と把握している方もいると思います。

言葉のシンプルな理解としてはまずその通りなのですが、一方で、このように色と空の関係が語られる際に、けっこう抜け落ちがちな「落とし穴」があると私は思っています。

それを理解するために、般若心経のポイントとなる箇所をいくつか、確認してみましよう。全文を丁寧に解説し理解するのが一番良いのですが、本書は般若心経の解説書ではありませんし紙幅の関係もありますので、ここでは要点のみにとどめます。

日本において般若心経は、いわゆるお経としてお寺や仏前で唱えたり写経したりなどが

一般的だと思いますが、宗派を超えて扱われているというニュートラルな性質があります。前述のように、特に宗派などにこだわらず「空」の概念の本質をつかみたいので、「空」の記述に関して最も有名で内容も端的にまとめられている般若心経を題材として行きたいと思えます。

仏教諸派の歴史背景や、漢訳される以前の音の響きの重要性などの専門的な議論はここでは脇に置いて進めますが、「悟りリテラシー」という視点から見た時にここで大切なことは、書かれている内容の理解と、使われている言葉の意味、そしてその言葉が指し示す概念をつかむことです。

そういう視点で全文を見ると、般若心経は仏教における悟りの概要を共有する上で、とてもコンパクトに要点が網羅されている「説明書」もしくは「解説書」のようなものだと、私は捉えています。

理解とは「理（ことわり）を解く」と読めるように、理解なしで唱えるよりも、真正面か

ら般若心経で説かれている「理（ことわり）を解く」ことの方が、よりその精髓に近づけるでしょう。

では、その「仏教的な悟りの説明書」の一番の核は何なのでしょうか。

確かに単語としては「空」なのですが、そこで掴み取るべき最重要の概念はまず何かと言いますと、

「自分と自分の宇宙は実在しない。」

ということに尽きます。

逆に、自分が存在していて、宇宙も存在している、という自他認識を無意識的な前提において「空」を語っても、それは少なくとも、般若心経で伝えんとしている「空」とは全く関係ありません。

「自分」は実在していないし、「自分が認識する宇宙」も実在していない。

端的に言うと、この現実世界と宇宙全ての存在の全否定ということ無くして発される「空」という言葉は、悟りの智慧が指し示すところの真実の「空」とはほど遠く、観念の世界にとどまってしまふ、ということになります。

これが「空」を語る時に、見落とされがち大きな落とし穴の一つです。

なぜそう言えるのか、般若心経の本文からの言葉を引きながら、悟りリテラシーを深めて行きましょう。

#### ◇色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊

般若心経では「五蘊皆空、度一切苦厄（ごうんかいくう、どいつさいくやく）」とあるように、「五蘊の真なる実態は、すべて、空であった。」と悟った時に、すべての苦厄、すなわち

苦しみ、災難、災厄は完全に一掃され、ゼロ化されて、どこまでもすっきりとした心そのものになった、と言うように説かれています。

では「五蘊」とは何かというと、

**色**（自分の身体と自分以外のすべての存在、物質）

**受**（五感をはじめとする感覚器による情報の入力）

**想**（入力情報を処理した脳が生む想念。思考、感情、思念、イメージ、表象、直感など）

**行**（実際の行為、行動につながる意志の作用）

**識**（AはBである、という認識作用、分別知識、思い込み、先入観、固定観念など）となります。

例えば、自分（色）が、あるカフェ（色）に入って席に着き、メニュー表にブレンドコーヒーがあるのを目で見て（受）、コーヒーが飲みたいな、コーヒーを注文しようかな、と思

い（想）ます。

そして店員さん呼んでコーヒーを注文し、出てきたコーヒーを飲んで（行）、このお店のコーヒーは美味しいから、店の場所を覚えておいてまた来よう、と思った（識）。といった具合ですね。

よくよく考えてみれば、私たちの人生の日々の営みのあらゆるサイクルはこの構造通りに進んでいます。このような仏教用語の、端的でロジカルな整理、説明の体系は、とても有用で優れた洞察に満ちています。

さて、普通に生きている分には別に「五蘊」など何も気にする必要もないのですが、悟りの世界を知ろうと思うと、そういうわけにも行きません。

何しろ「五蘊」のすべては、存在するように思っているけれど、「本当のところは、何ひ

とつ実在していないですよ。」というのが、般若心経の冒頭の規定なのです。

続いて般若心経では、「色」だけでなく、「受想行識、亦復如是（じゆそうぎようしきやくぶによぜ）」とあります。「受想行識」の四蘊も同じだと言うことなので、あえて文字にしてみるならこうなります。

「色即是空、空即是色（しきそくぜくう、くうそくぜしき）」

「受即是空、空即是受（じゆそくぜくう、くうそくぜじゆ）」

「想即是空、空即是想（そうそくぜくう、くうそくぜそう）」

「行即是空、空即是行（ぎようそくぜくう、くうそくぜぎよう）」

「識即是空、空即是識（しきそくぜくう、くうそくぜしき）」

一見してわかるように、色だけが空だ、と言うことではありません。

受も空であり、想も空であり、行も空であり、識も空である。

あらゆる物質、感受、想念、意志、知識。それらすべてを一つ残らず、完全に一掃する、ゼロにする。

その究極のゼロ化の境地こそが、「空」が開けるところである、というのが、般若心経に書いてある文章通りのそのままの読み方でしょう。

ちなみに五蘊の「蘊」という字は、「繰り返し集まる、集合する、蓄積する」といった意味合いです。

五蘊ですから、色蘊だけでなく、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊となりますが、それらの実体がすべて空である、ということは、まさしく今こうして文章を読んでいるあなた自身が、本当は実在していない、ということになるのです。

のみならず、自分の経験、知識、記憶、意志、行為や、外界に広がるあらゆる景色も音も、他者も、草も木も、太陽も月も地球も、そして銀河も宇宙すらも。

普段何気なく、存在する、と自分が認識しているすべてのものは、時空間も含めて本当はすべて幻影、ホログラフィーのようなもので、真実には実在していない。

つまり「自分と自分の宇宙のすべては実在していない。」という断定。  
それが般若心経の、何よりの中心メッセージなのです。

◇ひたすら、無い無い無い…

もう少し続けて見てみる前に、このあたりで一つ、改めて確認しておきましょう。

悟りの概念の最初の扉を開き始めたところですが、これが果たして、現実の自分の会社経営や組織運営に、何か役に立つのか？

宇宙があるとかないとか、この激変する世の中の状況や厳しい経済の低迷の中で、現実的

に生き残りをかけているのに、実際には何も役に立たない観念遊びにとどまるのではないか？

そんな声もふっと出てくるかも知れません。

実際、我欲や不善を戒める静的な仏教の心のあり方は、従来の資本主義社会、とりわけ勝ち組・負け組というような言葉がいつの間にかすっかり定着してしまったこの強欲的な金融資本主義の中では、その意義が見出しにくいかも知れません。

意志をたて、現実を作り続けていかなければならない実業の世界と全く真逆に、現実を全て否定してゼロ化し、自分の意志も、自分すらも実在しない、といきなり断定されても、それが一体何だと思う方もいるかも知れません。

私たちが慣れ親しんでいる現実の世界と悟りの世界との整合性のつけ方は、全体像が観えるまでは、何だかモヤがかかっているようにも感じるかと思えます。



しかし例えば、そのように自分でも無自覚的に集まってくる「想い方のクセ」こそが、まさしく「想蘊」である、と説いているのが般若心経の世界でもあります。

そして、そういった自分の認識の枠組みから自在になることが、悟りの智慧の活かし方へと繋がっていくのです。

なかなかバランス感を計りにくい向きもあるかも知れませんが、まだ第一章ですので、気楽に読み進めてみて下さい。

悟りリテラシーを高めること、悟りの智慧を実装することの具体的な意義は、追って触れていく流れで参りましょう。

人それぞれ、身体の動き方や力の入り方にクセがあるように、意識や心の動き方にも、それぞれのクセがあります。

身体の力を抜いてほどこききって、完全にリラックスしたゼロの状態に持っていくことが難しいように、意識や心を完全にゼロにほどこき切るのも、実際のところ簡単ではありません。

ですが、「空」の概念を自分のものとする上でそれは不可欠のもので、般若心経の中盤あたりの数行は、まさしくそういう内容に通じることを、何度も何度も繰り返し語っています。

今、意識的、あるいは無意識的に、自分が「当然こうだ、こうあるべきだ」と思うあらゆる世界認識を、一切合切、ゼロにほどこいてしまうことが大切ですよ、ということなのですが、実際に本文を見ると、何度も何度も執拗なほどに、「無い、無い、無い、無い、無い、無い……すべて本当は無いのですよ」と、ゼロ化を促す、無い無い尽くしのオンパレードです。

分かりやすくするために、少しだけ文意を補足しながら、ざっと文字にして書いてみましょう。自分ごととして、自分と、自分が認識しているこの世界、宇宙のすべてに当てはめて感じ取ってみて下さい。

私の目は無い。(実在しない)

私の耳は無い。(実在しない)

私の鼻は無い。(実在しない)

私の舌は無い。(実在しない)

私の身体(皮膚)は無い。(実在しない)

私の意識は無い。(実在しない)

(目が無いのだから) 色は無い。

(耳が無いのだから) 声・音は無い。

(鼻が無いのだから) 香り、匂いは無い。

(舌が無いのだから) 味は無い。

(身体・皮膚がないのだから) 触れる感覚は無い。

(意識が無いのだから) 何かに対する心のはたらきも、私が認識する現象・現実世界も、何ひとつとして無い。

こんな調子で、ひたすら無い、無い、無い、が続きます。

以下、無い無いがずっと続く該当部分を抜き出してみましよう。

**無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法**

(むしき むじゅそうぎょうしき むげんにびぜつしんい むしきしょうこうみそくほう)

**無眼界 乃至無意識界 無無明亦 無無明尽**

(むげんかい ないしむいしむいしきかい むむみょうやく むむみょうじん)

**乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得**

(ないしむろうし やくむろうしじん むくしゅうめつどう むちやくむとく)

**以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故**

(いむしよとくこ ぼだいさつた えはんにやはらみったこ)

**心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖**

(しんむけいげ むけいげこ むうくふ)

中盤以降のポイントだけ、簡潔に確認してみましよう。

そもそも肉体自我が本来実在しないのだから、老いることも死ぬこともない。迷い悩むことも、苦しみを滅することも、何かを知ったり何かを得たりすることも、一切ない。だからこそ、心を覆い妨げるものも、恐れも、一切ない。ということですよ。

物的、心的な、あらゆる存在の全否定と、それと同時に開ける「空」の次元の得心。それが般若心経の核です。

#### ◇すべてはひとつ、という共通認識

ひとまずここまでの概説を通して、これらの概念が現実的にどんな意義を持つのか、般若心経における悟りリテラシーを抑えておきましょう。

一つは、人間の性（さが）である、自我的欲望（エゴ）についてです。

我が膨らみ強くなると、それは周囲との摩擦や対立や不幸を生み出します。

例えばビジネス上、人を押しつけ、貶め、騙してでも利益を上げよう、という欲望が起点になって短期的にお金が入ってきたりしても、それは後々、自分にも周囲にも、様々な歪みを生じることになります。

逆に、全てがゼロ化された境地は、言葉を変えると全ての存在の差異と境界線がほどかれ、本来「すべてはひとつである」という、悟り（差取り）の基本概念をつかむ世界と直結します。

「企業は社会の公器である。」とは松下幸之助の言葉ですが、すべてはひとつであるという概念を起点とすることで、例えば「利他即自利」という公の理念とあり方が、ごく自然に受け入れられるようになります。

それは自社のステークホルダーを始め、社会に広く貢献し、共に繁栄するという企業本来

のあり方をまずもって明確にし、自認する上で、悟りの社会実装の第一ボタンとなるものと言えらるでしょう。

また、メタ認知やリフレーミング、Self Awareness（自己認識）といった言葉がビジネスシーンでも使われますが、自分の過去の経験則や知識に固執し、それを手放せずにいると、このVUCA時代の時代環境、経営環境を的確に見定めた俯瞰的な判断、先見性、意思決定力などを曇らせるというリスクを増大させかねません。

大量の情報が日々刻々と移り変わる超高度情報社会においては、自らの世界認識をゼロベース化して刷新し、世代や役職にこだわらずに幅広く柔軟な知見を統合する「衆知を集める智慧」というのがより重要になってきますし、過去にとらわれない斬新な判断力が必要とされることもあると思います。

そういったとき、自分自身や他者、あるいは社会情勢に対する認識に対して、知らず知らずに自らの「五蘊」に寄り集まった偏見や先入観、あるいは自分にとってのコンフォートゾ

ーンを起点とってしまう発想から、自在である必要があるでしょう。

あるいは組織論的にも、テイルのように、硬直した序列型ではなく、有機的で自在な生命的組織を指針とするとしたなら、経営者（トップ）と構成員（メンバー）の皆が、本質的には上下序列の別なくすべてひとつである、という共通認識は、組織やチームのベースをフラットに創る上で、大切な共通認識になると思います。

その土台は、立場に固執せずお互いの視点を活かし会える、という空気感やチームづくり、場づくりにも転換できます。有名なGoogleのプロジェクト・アリストレスの結果にも見られるように、ハイパフォーマンスチームの最大要因である「心理的安全性」を担保する上でも、非常に有効な素地となると思います。

また、それぞれの観念の中で、知らず知らずに分別的なジャッジメントをしてしまうのが、「五蘊」の世界の中に閉ざされている私たち人間共通の、五感と脳のはたらきです。

しかし、「自分と相手」という存在も、「正しい・間違い、良い・悪い、善・悪、好き・嫌い」といった分別智、不完全な智の世界というものも、本来は実在しないのです（無智）。自分の智を固定させず、過大視、絶対視せず、自分軸をときに自在に手放せるということ。また、相手軸の視点というものに、つながりあった相互受容の心で、フラットに心を移動できること。

それは、企業人としての自己分析、自己認識をする上でも、社内外の多様な人間関係を築く上でも、風通しのよく心理的安全性と信頼に満ちた組織を作る上でも、大いに力を発揮する悟りの智慧の一例と言えらると思います。

実際にはこういったことを単に知るだけでは変化に繋がりにくいので、実践に落とし込むために適宜テーマを定めての社内勉強会やシェア、ワークショップなどによって「自分ごと」として自覚できると良いでしょう。

#### ◇「顛倒夢想」に隠れた智慧

詳しくはまた第五章でも触れますが、全てをゼロ化する智慧、すべてはひとつであると思心する智慧、二元的な分別智から自在でいられる智慧、といった悟りリテラシーは、それを共通認識とするかしないかで、組織に深みのある違いをもたらすと思えます。

ちなみに般若心経では、五感と脳が生み出す錯覚の「五蘊」の世界に幻惑され、心が迷い振り回されることを顛倒夢想（てんどうむそう）という言葉で言い当てています。

そして、四苦八苦の絶えないその世界から完全に遠く離れることを指して、

遠離一切顛倒夢想（おんりいっさいてんどうむそう）

と云い、そのようにして空の世界に達した状態を、究竟涅槃（くぎょうねはん）と教え諭しているのです。

それでは、第一章の最後に、この遠離一切顛倒夢想、の解釈を独自に一步進めて第二章に移り、合わせて、般若心経の理解もより深いところに迫って行きたいと思えます。

鍵となるのは顛倒夢想が指し示す概念です。読んで字のごとく、**夢想を顛倒させる**、と読み解くことができるので、そのまま素直に解釈するところとなります。

“人間が「五蘊」の世界で認識している世界とは、起きて見ている夢のような想念体であり、それを逆さまに、ひっくり返して反転させ（顛倒）、夢の世界から一切完全に離れきったとき、涅槃、すなわち空という実相に至る”と。

「反転させる」という悟りの世界、これが、第二章の「不二不二」という言葉に象徴される「自在性の智慧」、より深い悟りのリテラシーにつながって行くのです。

## 第二章

自在ということ 一不二不二

◇二〇一八年秋、SAND@サンノゼ

二〇一八年の秋に、アメリカ西海岸のサンノゼという街で、SAND (Science and Non Duality) という名称のカンファレンスに参加しました。

こちらは wisdom2.0 の時とは違って、スピーカーではなく普通に参加者としてでしたので、気持ちの上でも余裕を持って、カンファレンスを楽しむことができました。

SAND も、始まりは wisdom2.0 と同じくからの二〇一〇年前後で、こちらはもともとイタリアで始まり、現在はイタリアとアメリカの両国で開催されています。

アメリカではこのように、サイエンスとスピリチュアリティを掛け合わせてより良い叡智を生み出していくためのオープンカンファレンスが、各地でさまざま開催されています。

ひとつ面白い特徴に感じるのは、それが資本主義社会の産業やビジネス、経営としっかり接続して論じられることです。

様々な研究や実践的な取り組み、それらの共有を通して、ひとつひとつ議論を積み重ね模索しながら改善、発展させていくさまは、アメリカの良い気風なのだと思います。

SAND は wisdom2.0 ほどの規模はないですが、wisdom2.0 に比べると年齢層や社会的な立場は高めの方が参加しているようでした。研究者や会社の経営者、また既に自分の組織、クラス、コミュニティなどを持っている指導者が多かった感があります。

ランチタイムのテーブルで同席した人と話していた時に、あなたはどんなことをやっているのか？と聞かれ、悟りの智慧を現代風にアップデートして教育産業化する仕事をやっ

ている、という旨を答えた時に、それは素晴らしいね！と即答されたのは非常に印象的でした。

なぜかという点、日本でも長年、様々な種類の交流会や勉強会、カンファレンスに参加してきましたが、名刺交換して挨拶するときの自己紹介がけっこうむつかしく、同じような自己紹介をしても、怪訝な顔をされることがほとんどだったからです。

日本でもこの何年間でマインドフルネスや瞑想が浸透してきたこともあり、潮目はすっかり変わった感がありますが、悟りや意識科学が経営、ビジネスの領域に繋がっていく速度感は、アメリカの特に西海岸と比べれば、だいぶ遅い感じは否めません。

その SAND の名称でもある Non Duality とは「非二元」のこと。すなわち、すべてはひとつである、という「一元性」の世界認識をさす言葉です。

非二元なので、「陰・陽や善・悪、正・誤」のような二極性ではないと意味で、「不二」とも言えますし、逆に言えばワンネスや一如、という言葉で置き換えても良いと思います。

古代インドのヴェーダでは究極の悟りをさして梵我一如と言いますし、日本神道の粹組みにおいても神人一如という概念が使われたりします。

あるいはもうすこし手前の概念として、心身一如、物心一如といった言葉などもあります。いろんな概念とともに「一如、ひとつ」と言われるのですが、その「ひとつ」の世界の概念は、いく段階かのレイヤー状にもなっています。「ひとつ」と言っても、その度合いは一樣ではありません。

例えば量子物理学者は、光速を超えて絡み合い、作用しあう量子（クオンタム・エンタングルメント）の世界を指して「すべてはひとつ」というかもしれないし、万物の理論を探求するひも理論の研究者は、ひも状エネルギーの振動というたったひとつの要素が多様な現象界を織り成す統一理論という視点で、「ひとつ」と言うかもしれません。

あるいは、宇宙はすべて愛ひとつで満たされている、という人もいれば、老荘思想を引き合いにして、万物の本質は一切斉同、みなひとつである、という人もいるでしょう。

それらも「ひとつ」であることに間違いはないのですが、ここでは、前章からの内容を踏まえて、もう一段深い根っここのところの概念を見て行きたいと思えます。

その土台が前章で見た、あらゆる存在と境界線、観念や想念が完全にほどけたゼロの世界、空の次元における「ひとつ」であり、それはそのまま、第二章で扱う Non Duality、**「不二」**という概念につながっています。

#### ◇相対と絶対

般若心経を見ても明らかのように、五蘊の現象世界がゼロ化された空の次元を、求道者は目指しています。しかし、あらゆる対立や分離を超えた Non Duality という「ひとつ」の世界を指向すると、概念的に整理しておかないといけない問題が出てくるのです。



何かと言うと、例えば Non Duality が本質で、それこそが実在だ、となると、「Duality (二元性) と Non Duality (一元性) という、新たな Duality (二元性) に嵌ってしまう。」ということですが。

「二元に非ず (不二) と一元に非ず (不二)、が分かれている二元性」となると、結局のところ二元性を超えられていないということになりますし、「一元の世界」と「二元の世界」がどのような概念で結びつくのかを整理しないまま、曖昧なレベルになってしまうのです。

また、悟りに論理性を求める人に対しては、真実にはひとつの世界があるという一元性 (Non Duality) の世界観に立った時に、「ではなぜ現象世界は二元性 (Duality) と、その広がりとしての多様性に溢れているのか」という問いへの説明も必要になります。

付随するものとして、Non Duality の世界を悟った人と、Duality の世界に止まっている人、という意味での二元性の問題も出てきます。

悟った人と悟っていない人、という二元性。これは、本来ならば全てが絶対平等である悟りを求めながらも、その学びの過程において誰かを特別視して崇敬したり、ピラミッド型の序列組織を生み出してしまふ、という構造的な問題にもつながって行きます。

これらは単に言葉とか理屈の上だけの話ではなく、悟りのリテラシー、悟りの智慧を現代社会に適応させて生かす道を考える上では、避けて通れないところなのです。

一元性、と言いなながらも二元性を超えきれない、というこの問題。

さてどうしたら良いのでしょうか？

整理の方向としては、Non Duality (非二元・一元性) が指し示す「ひとつ」の概念より、もうひとつメタ (高次) な次元において「ひとつ」を指し示す言葉と概念が必要になってきます。

二元性と一元性を同時に含み、対立と統合との相補性を持って、「ひとつ」になっている状態。

それを端的に結んだ言葉、概念が、「不二不二」ということになります。

ひとつでもなく、ふたつでもない。

で、ありながら、

ひとつでもあり、ふたつでもある。

二元性と一元性、どちらにもなれるし、どちらだけに偏り、とどまることはない。

私はこの「不二不二」のありようを示す意味合いの言葉として、研修などでも「自在性」という語をよく使います。

この概念をもう一歩クリアにするために、ここで少し角度を変えて、「相対性と絶対性」という言葉に置き換えてみましょう。

「相対」とは、それ単独でなく、他と関連づけられる概念です。

陰に対しての陽、善に対しての悪など、二元性の概念は相対的なものです。

では、二元性を越えた一元性、あるいは空は絶対性を持っているのかというと、実はそうではありませんね。

ここまで見てきたように、二元性と一元性、色と空、という単語と概念で、相対的になっ  
てしまうからです。

では、絶対とは何か？

絶対とは、他に比較するもの、対立するものがないこと、と言った意味合いになりますが、  
読んで字のごとく「対を絶つ」と解釈してみると、二元性と一元性の「対を絶つ」。

あるいは、色と空の「対を絶つ」という理解につながるることができます。

そこにこそ、絶対世界、絶対の境地、というものがありますね。

般若心経の言葉で言えば、色即是空の「即」が指し示す世界です。

ここで重要な鍵となるのは、対立する真逆の世界、位相が異なる世界を結びつつ、「Aと

Bを完全に同時に反転させる」という概念になります。

反転自在の境地、と言っても良いかもしれません。

これについての真髄は、第四章で明らかにして行きます。

ひとまずここでは、相対の世界がなんとなく融合しているのではなく、「同時反転」というメタ概念で結ばれている、それが「即」の世界であり、「絶対」の世界である、とだけ踏まえておいて下さい。

#### ◇悟りのレジリエンス

一旦ここまでをまとめながら、また少し別の角度も含め、深めて行きましょう。

私たちは普段、五感と脳が生み出す意識の世界（眼耳鼻舌身意）に生きています。

そして、私たちが日常的に知覚している色や音や声、香りや味といった現象は五感が生み出したものであって、五感自体がそもそも実在しないのであれば、感覚器官が生み出す現象も全ては幻影に過ぎない、というのが、般若心経の教えでした。

この現象、現実世界は、基本的には脳が生み出した認識の結果であって、実体を有したものではない、ということなのです。

仏教では人間の認識の根幹のことを「六根（眼耳鼻舌身意）」と呼び、認識の根っこが穢れや欲に満ちていたら正しい生き道は歩めないとして、認識の根っこを清浄にすることがこの重要性を説いています。

それは「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」という言葉で表され、仏教的な修行や求道者のあり方の指針とされます。

また日本神道でも、清浄さ、清澄であるということは非常に重視される概念で、そのために祓い清めの行や手法がいろいろとあります。

本質的に共通する点は、自我という幻影に惑わされることのないよう、一切合切、全て残らず清らかにクリアにし、ゼロにする、ということに尽きると思います。

すると、自分を惑わし、迷わせ、苦しませるあらゆる対象もまた、全て消失してゼロになる。自他の境界線が消え去り、主体と客体も溶け去り、主客一如とも言える、無限に広がる空の世界へと反転（顛倒夢想）する。

これは、方向性ということでは、二元性から一元性へと向かう流れです。

一元性、Non Dualityの世界は、自我もなく、当然ながら自他の分け隔てもないため、対立も起きようがありません。

その世界に皆が気づけば、争いのない平和な世界が訪れうる、という論理になります。

仏教的に言えば、此岸（現象世界・色）から彼岸（本質世界・空）へと渡ることであり、般若心経の最後の真言に当たるところでは、「彼岸に到達したものよ。」という意味合いの言葉が繰り返されます。

しかしこれだけでは、序章で述べたように、人間の欲得、損得勘定が行き交う資本主義社会、企業経営の現場においては、どうしても馴染みません。

人間の欲や執着を手放すことはある面では大切ですが、欲求を持ち、何かをなし得ることを諦めずに意志を貫徹することは、反面においてはとても大切になります。

もしも事業計画や売上目標、あるいはそもそも会社の理念や存在意義そのものに対して、リーダーが意志を放棄してしまったら、あつと言う間に現実世界で市場の荒波に飲まれてしまうでしょう。

ですから、単にゼロ化の方向に向かうだけの流れではなく、ゼロ化されたところから現実をいかに自在に生きるか、という視点が同時に求められてくることとなります。

例えば組織の人間関係でも、無条件の愛情を持って接するときもあれば、厳しく示しをつけて断絶するような態度で接するときもあると思います。

当たり前と言えば当たり前のことなのですが、人間の性質自体が一面的ではない以上、経

営業者やリーダーになると、人間の多様な側面を包括できるような器が、どうしても求められます。

同じように、六根清浄も、自分や他者を苦しめたり不幸せにする根本原因を祓い清める上では一面大切ですが、皆で俗世を離れるわけには行きません。

人間の観念としての善悪二元や清さ・汚れに拘泥せず、清濁併せ呑む、という局面も、時には必要になるでしょう。

このあたりのバランス感は何とも微妙なところで、現実的にはケースバイケースにもなるため、一律の正解があるものとは言えないと思います。

ただ、二元性の特徴、一元性の特徴、そして自在性の特徴のそれぞれを自分のものとしておくことは、その時々、変幻自在というか、機に臨んだ判断、意思決定、対応を打ち出していく上で、大きな力になるでしょう。

実際、コロナ問題に象徴されるように、V U C A時代はまさしく社会環境そのものが著しく不安定で不確定なので、その波を乗りこなす自分自身が固定されずに、自在にいる必要があります。

「中心」の「中」という字は、左右のバランスが完全対称になっていて、真ん中は質量ゼロの軸がひとつ貫いているかのような象形をしています。 「絶対の中心」を掴むことは、このような概念にも通じるものです。

それは現代的な言葉で言えば、「レジリエンス」といっても良いでしょう。

柳に雪折れ無し、という格言があるように、固定して折れてしまう大木や枝ではなく、しなやかに復元し、柔軟に回復できること。

A のときもあればB のときもあり、自分の意志や判断に頑なに固定されない。かといって優柔不断とは全く違って、揺るがない芯がある。だからこそ、A にもB にもなれる。

不二とは、言うなれば心の流麗としたありようのことであり、悟りの智慧がもたらす悟りのレジリエンスを示す言葉と言えます。

#### ◇ドクサとドグマ

また別の角度から考えてみると、不二とは、自分の視点の偏りに気づいてそこから抜け出し、意識を俯瞰した次元に置くためのキーワードとも言えます。

人間であれば誰しも、「これはこういうものだ」とか、「これはこうあるべきだ」あるいは「これはこうあらねばならない」と言った価値基準を、知らず知らずに持っています。

それが高じると、「これが何より正しく、ほかは間違っている」となり、さらに進むと、「この価値基準を受け入れられないものは排除すべきだ」あるいは「この教えや思想、理念を認めないものは抹殺してしまえ」となったりします。

その程度にはいろんなレイヤーがあると思いますが、端的に言うならば「ドクサ（思い込み）」と「ドグマ（教義）」という言葉で集約できるでしょう。

人間のあらゆる思考は基本的に五感と脳から生まれますが、そもそも脳が知覚できる領域はごくごく限られたものにすぎません。

例えば人間の眼は光の波長（電磁波）のごく一部の可視光しか知覚できませんし、耳が知覚できる可聴領域もごく一部にすぎません。

さらに自分が見聞きしたり経験する情報もまた、自分なりのごく限られたものでしかなく、人間の認識能力で世界のあらゆる情報を網羅することは不可能です。

その中でさらに自分の好みや思考、感情のクセがあり、善悪の観念があり、倫理や道徳観念の程度があり、文化や習俗があり、信念や信仰があり…。

と、いろいろな要素が複合した上で、自分の価値基準や社会の共通のルールや規範として、

「これはこういうものだ」とか、「これはこうあるべきだ」あるいは「これはこうあらねばならない」という思い込み（ドクサ）の中に生きています。

そして、ドクサが固定化すると、ドグマティズム（教条主義）という言葉があるように、「これが何より正しく、ほかは間違っている」「この価値基準を受け入れられないものは排除すべきだ」「この教えや思想、理念を認めないものは抹殺してしまえ」となってしまう。

ちなみにドグマという言葉は、もとは単に宗教上の教義を指す意味ながら現代はより広範な分野で使われますが、根本的に「私たちはみな、軽度のドグマを持って生きている」ともいえるでしょう。

ドクサやドグマも、裏返せば一面では人間の強い意志の原動力になりますので、他者に危害を加えない限りは、プラスの側面も大いにあります。

しかしどちらにも共通しているのは、二元性の世界の価値基準の中で、偏りを生じていることです。

さらにその偏りがバランス感を持たずに意識に固着して、そこから離れられずにどんどんはまり込んでいくと、意識の視野感是非常に狭くなり、同時に他者を受容することができなくなります。

だからこそ、その自分の二元的な偏りを俯瞰し、自覚してゼロの心になり、一元的な中庸の次元から全体を見る視点が大切になってくるのです。

今日では Self Awareness、自己認識力とも言われる意識の扱い方ですが、様々な瞑想や観照の手法においても、俯瞰してメタな次元から客観視することの重要性が説かれています。一方で、そのように俯瞰した次元を持っていない人や、持っていない自分に対するジャッジメントが働いたり、善悪の彼岸に到達した人を変に崇めたりすると、また二元性の落とし穴にはまり込んでしまいます。

一人静かに深い瞑想にふけり、こころ穏やかに一如のありように沈潜するのも良いですが、だから言って二元性の世界に生きる意識を劣ったものと断じる事もまた、手前勝手な

ドクサにすぎません。

この辺り、心の操縦の妙（たえ）なるところではありますが、自在性そのものである「不二」の概念を自己の内面や価値基準を照らす光源とする意味を、ぜひ一つの悟りのリテラシーとして踏まえておいて下さい。

#### ◇太極と陰陽五行

もうひとつ、一元と二元の関係性のことで、易の宇宙論にも少し触れておきましょう。

二元性の世界の最たるものとしては、陰陽の図がありますが、一般的にあの図は「陰陽太極図」と呼ばれます。

白と黒の勾玉が反転して描かれているような図形で、陰の中に陽があり、陽の中に陰があ

ります。それはちょうど反転しながら無限循環しているような構図ですが、陰陽ではなく「太極」をそのまま象徴する絵図は、特に描かれることはほとんどありません。

しかし、ものによって、真ん丸の真円のような、あるいは三次元的に見れば真球のような絵図と一緒に描かれている陰陽太極図があります。

禅のお寺に行くと、同じように、**空相とか円相、一円相**と呼ばれる図柄が飾ってあるところがあります。

仏教でいう空相にせよ、易でいう太極にせよ、あてがわれている単語が異なるだけで、真空状態の真円のようなイメージで象徴としては全く同じ描かれ方をしている点は、たいへん大きな意味合いを持っています。

また『老子道德経』では万物の根源を「道（タオ）」と名付けていますが、タオの世界は「一なる世界」であるとの記述が何度か出てきます。



これら全ては、現象世界の概念の向こう側にある本質の概念として、ぴったりと共通しているものです。

道徳経には、「一は二を生じ、二は三を生じ：。」と記されている一方、易においては、「易に太極あり、これ両義を生じ：。」と、あり、万象の根源である太極から、両義(二)、四象、八卦：と続いていきます。

どちらも一元性の世界から二元性、多様性の世界が生成化育していく様を記述していますが、一元性の世界から二元性の世界が生まれる流れや仕組みについては、東洋思想のみならず、世界に様々な叡智や伝承が残されています。

数秘や数霊、言霊として説かれる事もあれば、神聖幾何学や曼陀羅のようなものもあれば、カバラや神話のようなものもあります。

また、それらを現代科学の見地と接続させて解釈する試みも見聞しますが、面白い符号

点がたくさんあつたりします。

それぞれ詳細に比較研究すれば、共通点と相違点があるでしょうし、解釈の仕方によっても見解が分かれるところも多々あるでしょう。

それらの専門的な研究は膨大なものとなり、ここで細部までを取り上げることができませんので、私たち日本人に馴染み深い陰陽五行の概念と関連づけて少し触れておきます。般若心経からの流れとまとめ、ここまで出てきた概念を単語として繋げるならば、大枠として次のようになります。

① 空の悟りに向かう流れ。

五蘊(現象世界・二元性・不二) ↓ 空(本質世界・一元性・不二) || タオ || 太極

② 空(太極) から現象世界の創造に向かう流れ。

太極(一元性・不二) ↓ 陰陽両義(二元性・不二) ↓ 五行(木火土金水の相生相克)

そしてさらに、陰陽と五行の働きが結ぶものとして十干があり、日本でも馴染みの深い十

二支とも合わせて、天（十干）と地（十二支）の巡りを説いていく東洋の叡智へと発展します。

98

この①と②の流れは本来不可分のもので、まさしく「不二不二」という言葉で括られるように、両方あってひとつの完全な反転自在の円環構造となるものです。

次の第三章でも論じますが、普段私たちが生きている現象世界の中は、様々な因果関係によって成り立っていますし、その最たるものが科学的な法則だと言えると思います。

また、易の世界や様々な占星術に見られるような法則性やパターンもあり、それらはずべからく、原因と結果、AだからB、という二元性の性質を持ちます。

しかしながら、一元性の世界はそもそも主客未分の世界であり、単線的な時間も存在しない世界なので、因果関係や相関関係が成り立ちません。

すると、因果や運命、あるいは宿命や天命といったものと、そういうものに全く囚われな

い自由意志や創造意志は可能なのか、という、深くて難しい哲学的な命題が必ず出てきます。そういうことをそれぞれが自分なりに腑に落としていく為にも、まずここでは、二元性から一元性、そして一元性から三元性への両方の流れは表裏一体のものであり、そのどちらもが等しく大切な概念である、という点を、しっかり押さえておきましょう。

#### ◇意志の始原をどこに置くのか

さて第二章の最後は、それぞれの主観的な感覚に対して、一つ投げかけをして終わりたいと思います。

空でもタオでも太極でも、言葉はどれでも良いとして、宇宙の始原に何にも存在がなかったところが起点だとしましょう。

この章の柱の概念である「不二不二」で行くならば、不二（二元性）の世界から（不二）

99

二元性の世界が生まれていきます。

陰陽五行思想をはじめ、その「仕組み」を説明する体系はいくつかありますが、そこから現象世界が生まれた「理由」は、いったい何なのか、という問いに、あなたなら、どんな答えが用意できそうでしょうか。

例えば、人間の観念的な理由など何も無いだろう、という考え方もあるでしょうし、神のような何らかの創造主の意志をそこに想定する方もあるかもしれません。

人によっては瞑想の最中に、始原の意志そのものを感じたという人もいますし、スピリチュアルな視点としては、分離の世界を経験するため、自らの魂の向上のため、地球に愛と調和と進化をもたらすため、といった直感もあるでしょう。

あるいはよりロジカルに、哲学的に思索していく人もいるでしょう。

この問いは大きく捉えれば、宇宙が生まれた「理由」であり、そこから銀河が、太陽系が、

地球が、そして多種多様な生命体が生まれ、人類の歩みから、果てはシンギュラリティまでが叫ばれている宇宙の全歴史の、その根源的な「理由」への問いかけです。

これは、宇宙全体に流れる意志が一三七億年もの進化を続けているとしたら、詰まるところ、私たち人間は何のために生きているのか、という問いにもつながります。

より身近なところに引きつけて言えば、あなたが生きている意味、人生の意味であり、日々、様々な出来事が起き、喜び、怒り、時に哀しんだり笑ったりと、一〇〇年間もの長きに渡る自らの命を「生きる」ということの、その意味です。

あるいは本書の趣旨に立ち戻って、経営と悟り、というテーマを立てるとしたなら、会社を経営し、事業を展開し、社員に、顧客に、世の中に、自分の意志を具現化していくことの、その意味です。

もちろん答えは様々で、それが私たちそれぞれの人生観であり生きる意味、あるいは企業

の存在理由の確認作業でもあると思うのですが、私自身の自問自答の中でも、一つ大切にしている視点があります。

それは、宇宙の始原に何らかの意志があったと規定するのが自分の自由だとしたら、「**どんな意志を自分という存在の根源に置く**」ことが、自分の人生の意味をより充実したものにす  
るだろうか」ということです。

その問いを深め続けることは、自己を超え、まさしくトランスパーソナルの意味するところのように、自己超越した視点からの回答をそれぞれに引き出してくるものだと思います。

そして、自己の根源への投げかけとそこからくる気づきは、自他一如のありようから生じてくる、共存共栄の視点の広がりにも寄与するものとなると思うのです。

自らの意志の始原をどこに置くのか。

その意志から連なる今この自分の存在理由を、どう解釈するのか。

それは、個人にしろ法人にしろ、その存在理由というものをより深く鮮やかに浮かび上がらせる上で、大切な気づきをもたらすものになると思います。

## 第二章

### 自分の宇宙を再創造する ― 自生自滅 ―

#### ◇動的平衡と「無我」

第三章からは、もう一歩進んで悟りリテラシーを深めて生きましょう。

第三章の柱となるキーワードは「自生自滅」これは、荘子の言葉による概念です。ここでは、二つの読み方に分けて、それぞれに独自の解釈をほどこしながら、概念を噛み砕いてみたいと思います。

一つ目の読みは、

「自ずから生じ、自ずから滅す」

もう一つの読みは、

「自ら生じ、自ら滅す」です。

まず一つ目の読みから行ってみましょう。

「自ずから生じ、自ずから滅す」というとき、「自ずから」ということは、何か他からの作用を受けることなく、それそのものが主体となって、変化や働き、作用を起している、ということになります。

身近なところで見てみると、私たちの身体がそうです。動的平衡という概念を世に出した生命科学者の福岡伸一氏は、「生命とは動的平衡にある流れである」と規定されましたので、この概念を押し広げてみましょう。

私たちの細胞、私たちの生命は、一秒も一瞬たりとも、静的に固定して止まることはありません。常に分解と合成が同時進行する「流れ」の中にあり、その本質を言葉にするならば、流れそのもの、変化そのもの、動きそのもの、とでもいうべきものです。

細胞、細胞膜の働きを解明する中で得られた知見として、私たちの通常の五感や脳では知覚できない微細な生命領域の話ですが、それは生命科学が明らかにした、一つの真実の姿です。

大づかみにいうと、自分の身体という生命体は、一瞬も止まることなく、分解し、合成している。言葉を変えると、自分自身を自動的、自律的に常に破壊し、創造し続けていることになります。

もう一つ、よく知られている科学的事実として、素粒子物理の話に飛んでみましょう。

私たちの身体を含め全ての存在の構成要素は、一体何なのか。存在の本質、物質の本質を明

らかにしようという人類の探求の中で、二十世紀の物理学は、素粒子の基本的性質を明らかにしました。

私たちの身体を構成する細胞、細胞を構成する分子、分子を構成する原子。そして、原子を構成する素粒子。

素粒子の標準理論に登場するクォークは、「自ずから」生滅現象を繰り返していることが確認されています。あるいは量子エネルギーの場においては静止状態がなく、波打つ水面のように常にゆらぎ、粒子の対生成、対消滅という現象が起こっていると考えられています。

これも先ほどの生命の動的平衡と同様に、クォークは、一秒も一瞬たりとも、静的に固定して止まることはありません。

常に生成と消滅が同時進行する「流れ」の中にあり、その本質を言葉にするならばやはり、流れそのもの、変化そのもの、動きそのもの、とでもいうべきものです。

シンプルなイメージとしては、超ミクロの粒子が、「自ずから」生じては滅している、つまり、現れたり消えたりしている、ということですが。

そして私たちの構成要素がクオークであるなら、見方を柔軟にすれば、細胞が自分自身でもあるように、生滅するクオークは超ミクロの私たち自身の姿であるとも言えるでしょう。古代ギリシヤではヘラクレイトスが「誰も同じ川に二度入ることは出来ない」という言葉と共に残した、有名な「万物流転（パンタレイ）」という概念があります。

そして仏教では日本人に馴染み深い、「諸行無常、諸法無我」という言葉があります。「静的な定常の状態は無い」というこの概念とも、生命、物質の動的平衡の概念は綺麗につながって行くでしょう。

そうなると、生物学的にも物理学的にも、今現在、自分が自分とと思っている自分は、定常した存在として存在してはいない、という解釈が導けることになります。

そしてそれは、つまるところ、「本質的に、自分は一体どこに在ると言えるのか？」という問いにまでつながって行くのです。

では、その答えは、というと、おそらく御察しの通りです。

そう、「どこにもいない。」

それを仏教においては、「諸法無我」と言っているのですね。

大事なところなので繰り返しますが、こうなります。

自分という存在は、一秒も一瞬たりとも、静的に固定して止まることはありません。常に生成と消滅が同時進行する「流れ」の中にあり、その本質を言葉にするならば、流れそのもの、変化そのもの、動きそのもの、とでもいうべきものです。

第一章の「五蘊皆空」でも触れたところですが、少し違う角度と解像度で明らかにしていると試みてみてください。

私が自分と思う自分は、真実には実在しない。

私の本質は、「流れそのもの、変化そのもの、動きそのもの」であり、それは同時に「色（生じた世界）と空（滅した世界）」を結ぶ「即の世界の働き」を意味します。

もう一つ繋げておきますと、「現れる」と「消える」という真逆の作用、真逆の世界を同時に司る中心の働きそのものは、「不二不二」の章で出てきた「反転自在性」というメタ概念と重なることとなります。

#### ◇五次元宇宙が常識の時代

物理学の世界では、私たちが普段馴染んでいるこの四次元世界（空間三次元と時間一次元）の向こう側に、第五の次元、五次元の世界がある、と想定する理論は、一つの常識となっています。

それは前述のように、素粒子がどこか別の次元に消えてはまた生まれてくる、という事実

からも導き出されますし、あるいは重力子（グラビトン）はこの宇宙の中だけにはとどまらない、といった事実からも推定される物理学的概念です。

また、万物の理論の候補として探求が続くひも理論を発展させたM理論においては、私たちの四次元宇宙を「閉ざされた系」と見立て、その四次元宇宙の向こう側に開かれて広がる別の次元領域を、数理的に含みいれています。

ひも理論という「ひも」とは物体としての「ひも」ではなく、ひも状の「エネルギー振動」のことですが、そのエネルギー振動すらも、宇宙の中に留まり続けているものではない、ということになるのです。

こういったことから、四次元と五次元の間、つまり「宇宙の中と宇宙の外」の間に、往還して出たり入ったりする何らかの働きがある、というメタ概念が想定されることとなります。

それは、ここまで見てきたように、般若心経の色即是空の「色」「空」と、双方の間にある「即」の概念と紐づけてみても、矛盾なく一致するのが観えてくるかと思えます。



私たちが認識している物質界はほんの四、五％に過ぎず、あとはダークマターやダークエネルギーと言われますが、それらも、無でもゼロではなく、何らかのエネルギーが圧縮されて存在化しているものです。

その総体を宇宙の中のエネルギーや物質の集合体としてみると、「蘊」の字義の「繰り返し集まる、集合する、蓄積する」という意味の通り、宇宙の中に集まり蓄積している「閉じられた次元」と捉えることができます。

そして、「五蘊皆空」という通り、圧縮され集まっていたエネルギーや物質が反転して全てゼロ化されたとき、別の「開かれた次元」への相転移が起こったと見立てることができません。

つまり、色と空というものもまた動的平衡の無限循環の流れの中にあり、色相は生まれたり消えたりすると同時にまた、空相も生まれたり消えたりすることになります。

すると宇宙そのものも実体がなく、宇宙は、一秒も一瞬たりとも、静的に固定して止まる

ことはありません、という、動的平衡の宇宙観に繋がるのです。

第一章では、「自分と自分の宇宙は実在しない」と述べましたが、実在はしないけれども、私たちの通常の認識において、確かに宇宙は存在しています。

しかしそれは「流れ」が生み出す存在現象という、全体の一側面にすぎません。

真実は、常に生成と消滅が同時進行する「流れ」の中にあり、その本質を言葉にするならば、流れそのもの、変化そのもの、動きそのもの、とでもいふべきもの、となります。

その働きが直観できれば、「自ずから生じ、自ずから滅す」という概念もまた、しっかりと掴むことができると思います。

#### ◇視覚のスペックを超えて

いふなれば、自動的、自律的に、始まりもなく終わりもない動的平衡の「流れ」の中で、「自ずから生じ、自ずから滅す」という作用を繰り返している、ということ。  
身体、生命、物質、エネルギーなどの本質を見て行くと、そのような共通要因が重なり合っている働きが見えてくるのです。

しかしもちろんこれは、私たちの通常の世界認識の感覚とはかけ離れています。

今、自分の目の前にあるパソコン、目の前にあるスマホ。

日々を生きている自分や、家族、友人。

毎日見聞きする、社会の様々な出来事やニュース。

それらは現実として当然存在しますし、もし悟りが開けたとしても、身体感覚も当然あり、思考も感情も煩惱も欲心も、少なくとも肉体の死を迎えるまで、無くなる訳ではないでしょう。

ですが第一章の般若心経の、無い、無い、無い……。の項で見えてきた通り、「五蘊」は実在せず、存在すると思うのはあくまでも、「六根」という人間の認識の作用の結果に過ぎません。

例えるなら、脳という臓器の性能、スペックとして、人間の脳ではこのような世界認識、宇宙認識になっている、ということですが、犬の脳のスペック、鳥の脳のスペックなどそれぞれ異なる宇宙認識の中の、一つの相対的な宇宙であるということですが。

視覚一つをとってみても、人間の視覚能力、視神経や脳の視覚野の処理能力といったスペックには限界があり、X線や紫外線といった可視領域の外は認識できません。

同様に、人間が知覚できるスケール、サイズには限界があり、どんなに目が良い人でも、細胞内で起こる生命の合成や分解作用が見える人はいませんし、素粒子が現れたり消えたりしている様を肉眼で楽しむこともできません。

だから視覚機能のスペックの限界を拡張するために、ミクロの世界を観察するための顕

微鏡や、マクロの世界を観察するための望遠鏡を、道具として開発してきたのです。

もしもサイボーグ人間のように、細胞のスケールを認識できる顕微鏡を視覚のスペックとして備えた人がいたとすれば、そのひとの世界認識の中では常に、生命の動的平衡を感じながら生きることができるとしよう。

同様に、もしも素粒子が見える視覚のスペックを備えていれば、あるいは超微細なエネルギー振動が見える視覚のスペックを備えていれば、と想像してみると、やはり物質やエネルギーの動的平衡を感じながら、その「流れ」も実感することができるのではないのでしょうか。

そして、そのような科学的な観察や理論の次元の先にある、宇宙全体の生滅の「流れ」が視覚を超えて観えたとき、それをもって、真実の世界への「心眼が開いた。」ということになるのだと思います。

達磨大師の面壁九年ではないですが、眼の前に厳然として存在する物体、物質の本当の姿をひたすらに心の眼でもって観続け、直覚するに至る瞬間、それが悟りと呼ばれるものなの

でしょう。

しかし実際のところ私たちは、そのような深く長い行法をずっと行なっている訳にも行きません。

ですから一章の「三つの般若」の項で触れたように、修所成慧（しゅしよじょうえ）の悟りの道に敬意を払いながらも、聞所成慧（もんしよじょうえ）、思所成慧（ししよじょうえ）の悟りの道において、視覚を超えた悟りの世界の概念をさらに深めて行きましょう。

#### ◇アナログVRと環世界

人間の世界認識に関連して、一つ私のエピソードをご紹介します。

以前、GoogleでAR開発をしているアメリカ人のエンジニアと話した時のことです。

Googleの建物内には関係者の知り合いがいないと入れないのですが、たまたまご縁があつて、Google内はフリーで提供されているオーガニックのランチを頂きながら、意識やテクノロジーに関するお互いの関心ごとをあれこれ話していました。

彼はA R（拡張現実）の技術開発をしているエンジニアなので、理工系の技術畑の人です。A Rはデバイスを活用して、自分の世界認識の中にバーチャルなキャラクターなどを存在させ、現実を拡張することが出来ます。

いわば人間の脳の外側に認識機能を拡張する道具をセットすることで、より人間が楽しく、幸せに生きることには貢献するための技術と言えるものでしょう。

それは広い意味での人間の意識のあり方に関わる技術なので、意識科学的な側面も絡んできます。

私はアメリカでも理工系の技術者の中には、日本アニメの「攻殻機動隊」のファンがいたりすると聞いていたので、話の中で、彼に知っているか聞いてみました。

するとやはり良く知っていて、「攻殻機動隊」と、それに影響を受けたハリウッド映画「マ

トリックス」の話などにも繋がって行きました。

どちらの映画も、人間のアナログの脳とデジタルの情報技術が接続され、電脳化された未来、という世界設定なのですが、それは脳と意識、科学とテクノロジー、アナログとデジタル、量子技術の可能性などの話をする上で、とても便利な共通理解をもたらしてくれます。そこで私は、私たち人間の通常の世界認識について、こんな趣旨の質問をしてみました。

「人間は生まれながら誰も例外なく、五感というセンサーによる入力経路と、脳という情報処理のデバイスをかぶって、脳が出力したV R（仮想現実）の世界を生きているようなものだと思うけれど、どう思いますか、と。」

それに対する彼の返答は、「その通りだと思うよ。」というものでした。

この問題意識は私にとって非常に重要なものであっただけに、脳というものがある意味

でアナログのVR（視覚だけではなく「六根」の全ての感覚として）のような装置である、というような比喻がAR開発のエンジニアと共有できたことは、楽しく有意義な時間でした。

もつとも、脳がVRのようなものである、というような単純かつ無機質な結論ではなく、脳の未解明な神秘的な働きを含め、意識の真相については、心臓や腸、DNAや潜在意識、情報場など、他にも様々な要因があると思います。

一方で、この現実世界をどう解釈するかという点においては、現実とは、脳というデバイスが出力している仮想の画面である、という視点は、悟りの智慧を活用する上で、非常に大きな意味を持つのです。

この点に関連したものとして、生物学者のユクスキユルは、「環世界」という概念を提示しています。

生物種は多様ですが、それぞれの独自の知覚によって、それぞれの独自の世界を作り上げており、時間や空間も、一定の機械的なものではなく、それぞれ独自のものとして認識して

いる、といった趣旨です。

機械的、客観的な科学法則に沿ったものを「環境」と呼ぶならば、機械論的な原理には立たず、主観的な知覚の結果の世界を「環世界」と対置する。

そして人類もこの地球上に生きる一つの生物種であり、私たち一人ひとりもまたそれぞれが独自の知覚によって世界を作り上げているのであれば、当然ながら、それぞれの世界認識、宇宙認識というものは違うものになってきます。

そして生命、身体とは動的平衡であるならば、自分と自分の宇宙は、実はそれぞれが「自ら生じ、自ら滅す」という宇宙観、つまり一人がひとつの宇宙の創造主である、という宇宙認識へと繋がっていくのです。

#### ◇量子宇宙と第一観測者問題

自分と自分の宇宙は実在しない。

けれども、一人ひとりが、「自分の宇宙」を生じては滅し、生滅を起こす働きの無限循環の作用の中で、創造と破壊を繰り返している。

宇宙は一秒、一瞬も止まることなく、常にこの瞬間、新たに立ち現れ、消失し、その都度新たな「蘊（集合体）」の世界を結びながら、生成化育を続けている。

この変化そのものの動的平衡の作用は、荘子の「化」の思想として知られる宇宙観とも通じます。

そして、それを物理学の視点で合わせて見るならば、やはり量子的宇宙観に登場してもらう必要があります。

超ミクロ領域の量子のふるまいの世界を明らかにする物理理論が生まれてからはや一〇〇年、二十世紀前半に体系化された量子力学の理論と実験結果は、今日の意識科学や脳科学、

また意識変容や瞑想、悟りなどの実社会への浸透水位と並行して、一般的なリテラシーとなってきた感があると思います。

量子力学の専門的な数理や方程式までは分からず、理論の細部の不理解などがあるとしても、波動と粒子の相補性、観測者効果といった基本的な概念は広く知られていますし、それらは人間の認識や宇宙の本質を類推するための十分な足場を提供してくれています。

シュレディンガーの猫の例えで有名な「状態の重ね合わせ」や観測者効果による「波束の収縮」、あるいはアインシュタインの「神はサイコロをふらない」で有名な、粒子の位置と運動量に関するハイゼンベルグの不確定性原理は、私たちが悟りの概念を掴んでいく上で、素晴らしい補助線になってくれるものだと思います。

量子力学の学術的な研究者からすれば飛躍したものと感じられる向きもあると思いますが、観測行為が対象の状態に影響を及ぼし、しかもそれは非決定論的であると言う視点は、物理学の枠組みを越境して、意識や現実創造の本質を探求する人々に、多大な影響を与えます。

した。

意識や宇宙の普遍的真実が学術的・科学的な実証や統一見解として定義されることは当面先のこととして、ここで悟りのリテラシーと量子的世界観を紐づけて解釈を加えておきましょう。

端的にいうと、観測した瞬間に波動が粒子化され位置が特定される、との理解から派生して、観測者の意識が存在に影響を与える、その人の意識が現象を引き寄せる、人間の認識がこの現象世界を定常的なものとして存在させている、といった視点が提示されていきます。

それらは脳神経、脳機能の特性や能力開発のメソッド、あるいはスピリチュアルな叡智とも親和性を持って、様々な文脈で語られています。

しかしここでひとつ、根本的な前提をひとつ確認しておきましょう。

何かと言うと、本書の初めから般若心経を中心に何度も繰り返し言及している、現象世界の全ての存在は、真実には実在していない。と言う、悟りの基本的なリテラシーに関することです。

量子的な世界観では、その大前提として、量子が存在し、波動が存在し、粒子が存在します。そして何より、観測者という主体が存在しているのです。

その観測者を自分だとした時に、ここまで見てきたように、その自分とは本来、どこに実在していると言えるのでしょうか？

悟りの世界においては、私はここに実在せず（無我）、量子も波動も粒子も全て、エネルギー振動や物質の集合体としての「色」は即ち「空」ということになるので、それらもやはり、実在はしていないことになります。

あるいは、観測者としての私も粒子の集合体であるとするなら、まず私を粒子化させて存

在させてくれる誰か他の観測者が必要ではないか、という思考実験もありえるでしょう。

しかしその場合、その観測者もまた誰かに観測してもらう必要がある、その観測者もまた他の誰かに観測してもらう必要がある…と、永遠に、初めの観測者を探し続けなければいけなくなります。

私はこれを「第一観測者問題」と呼んでいるのですが、存在世界の中に、第一観測者を見つけることは、ロジック上はできないことになります。

しかし実際私たちは、自分という存在も、自分の周りの多様な存在も、当たり前のように認識しています。

どこにも存在しないはずの私（観測者）が、存在しないはずの波動を粒子化させて現象化させている。

となると、その私（観測者）と対象、つまり主体と客体が分かれた状態を生み出して現実

化、現象化させている実体は、私の身体や私の脳、私の意識や私の波動ではなく、四次元世界の外、メタな基層次元にある「何か」ということになります。

哲学者の西田幾多郎の言葉を借りるならば、「主客未分」の状態から、主客分離の世界を生起させてくる、その根源的な働きは、一体何によるのでしょうか。

同時にそれは、ここまで見てきたように、主客分離という二元性（色）の世界と、それを生み出す一元性（空）の世界との関係性を理解する問いにほかなりません。

般若心経において「諸法空相、不生不滅」とあることを考えれば、「主客未分の第一原因」としての「空」は、生じることも滅することもなく、始めなき始めから終わりなき終わりで、一切の他の要因から独立して普遍的に「ただ在る」、「それそのもの」と解することができるでしょう。

つまり基本的な考え方としては、「空」を起点として、その基層次元から生じて集まった



振動や波動、粒子の集合体としての主体（私）が結ばれ、その主体の観測、あるいは認識の結果として、不確定、不安定な超ミクロの量子世界が粒子化され、現実、現象世界となる、といった流れになります。

そして、その一連の生成の働き一方向にとどまらず、「自ら生じ、自ら滅す。」という自在性の動き、流れの中で、常に瞬間瞬間に新たなそれぞれの宇宙の破壊と創造をし続けている。

ということとは、「色と空」「生と滅」という相対性の奥にある、「生滅一如」の絶対性の働きのもの。それが悟りの視座からみた、自分と自分の宇宙の起点であり、第一観測者の実体であると言えるでしょう。

#### ◇「蔵識」と情報場の影響

一人ひとりそれぞれが、自分の宇宙を創造している。

一人ひとりと宇宙、ということを考える時、それに付随していくつか整理すべきことがあるのですが、ひとまずここでは、意識の深層について触れておきましょう。

中心テーマは、量子的宇宙観の延長上に自分の宇宙を自分が認識して存在させているとした時に、自分の自由意志はどこまでを現象化できるのか、ということに關してです。

これに付随して、思考や意識の力による現実化、脳機能と現実認識の関係、引き寄せの法則、言葉・言葉の働きや、イメージングや紙に目標を書き出す手法などなど、様々な「現実創造」の智慧があると思います。

当然ながら、それぞれ理論的にも実際の効果としても素晴らしいものがあるでしょうし、一〇〇%自分の意志が現実になるとは行かないまでも、そういう智慧を活用するかしないかという点では、結果は全く違うものになるでしょう。

一方、自分の意志のあずかり知らないところで、人生では様々な出来事に見舞われたりします。

そういったことも含めて、果たして自分の現象の人生の全ては自分の深いところでの意志の働きによるものなのか、はたまた、因果律や運命論のように、何か他の要因の影響を受けて変化したり決められたりしているものなのか。

この問いは、古来から様々な角度から思索され、論じられ、知的に体系化されているテーマでもあると思います。

心理学的にはよく氷山の一角の例えで言われるように、分類の仕方は様々としても、無意識や潜在意識、集合的無意識といった概念で説明され、それらは顕在意識の自分の現実に影響を与えているとされます。

一方で、各種の占星術や血液型占い、東洋思想がベースとなっている動物占い、易占いや四柱推命、タロット、マヤの暦のように類型化されたものもあり、それらは天体の運行に対する智慧と合わせて、自分の性質や人生に影響を与えているとされます。

科学の見地からは、DNAの暗号として、遺伝子のスイッチオン・オフが自分の能力や性質にも影響を与えていると言われ、近年はエピソードイクスの分野において、外的環境や深層心理が遺伝子を変化させるという研究も聞かれるようになりました。

あるいは実証が難しいながらも現実に何らかの影響が想定されるところでいうと、DNAの起源としての先祖の影響や、宿業（カルマ）といった要素、あるいは霊的な作用や高次存在からのチャネリング、メッセージ、といった視点もあります。

そして仏教の唯識論で考えるならば、前五識と意識（眼耳鼻舌身・意）のほか、より深いところには、末那識、阿頼耶識というものがあるとされ、合わせて八識によって「識」の説明がなされます。

興味深いことは、阿頼耶識の「阿頼耶」とは「蔵」の意味を持ち、そのために別名で「蔵識」と呼ばれることがあることです。

「蔵」という単語に象徴されているように、種々の現象を起こす何らかの要因を唯識論で

は種子（しゅうじ）と呼び、その種子が蓄えられているところ、という意味で「蔵識」と銘打たれているわけです。

この種子（しゅうじ）という概念を現代的な表現で一言で言い表すならば、「情報」という言葉が最も適切かと思えます。

情報宇宙論という物理学の仮説があるように、人間の記憶情報、DNAの情報、デジタルデータの情報や量子データの情報などを要素還元的に突き詰めていくと、現代科学の実証範囲を超えた何らかの超微細領域で作用する「情報場」があると仮定することができるでしょう。

それを唯識の階層分類で語るのか、アカデミズムや各種分野の知見、研究、叡智を統合して語るのかはさておき、こういった「情報の場の階層」は相互に作用し影響しあいながら、自分の現象を織りなしていると思えることができています。

そのため、意識の学びにおいては人それぞれに、自分の育った環境や遺伝的要因、心理的

なトラウマやマインド・ブロック、霊的な影響や所属組織の集合的無意識の場の作用など、日常意識では捉えにくい領域の整理と気づきの拡張が求められてくるのです。

#### ◇自分の意志で再創造する自分の宇宙

ここまでつらつらと言及してきた様々な要因は、無自覚のうちに自分の意識に働きかけ、人生を左右し、「AだからB」という因果律の作用として現れてくるでしょう。

それらは現象界においては常に作用し続けるものであって、悟りを得た後であっても、少なくとも現実に身体を持って生きている間は、その影響をずっと受けざるを得ないと私は考えています。

もちろんそれらは悪いことばかりではなく、自分にとって良い影響を与える因果律も情報場の作用も、当然ながらたくさんあるでしょう。

いずれにしろ再度ここで言及しておくべきことは、このような多様な要因が重なり合ってくる四次元世界の中にあつて、自分の意志で自分の宇宙をどのように、どこまで変化させ、再創造できるのか、という点です。

悟りの智慧の応用として、特に実業に直結する企業活動にとっては、このテーマは外せないものだと思います。

これについては様々な視点での見解を踏まえてそれなりに詳しく整理する必要があるため、細かくはまた別の機会にまとめてみたいのですが、悟りリテラシーの全体像を扱う本書では、原則的などころだけ触れておきましょう。

唯識論において重要なことは、「蔵識」の先にはやはり「空」の悟りの世界があるとされている点で、そこにおいては八識も実在しません。ここが大切な鍵になります。

「蔵」とはまさしく何かを集めて蓄積するところのニュアンスであり、これは般若心経の

「蘊」の意味合いとも真つ直ぐにつながるものだと言えます。

「空」から発する何らかの要素が集まり、集合体となつて蓄積されたとき、その集積の度合いが入れ子状に階層化されるようなイメージなのですが、その総体を指して、私たちは現象と呼んでいる、ということになります。

「蔵識」を超微細な「情報場」というふうに捉えたとき、私たちは宇宙に入れ子状に畳み込まれている多様な情報場の影響の中にあるわけですが、その「閉ざされた次元」を反転させたところに、五次元の空の世界が広がっている、ということでした。

そして、四次元と五次元の間、つまり「宇宙の中と宇宙の外」の間、そこが自分と自分の宇宙の起点である、ということ、本章では確認してきたと思います。

そこは、他から何ひとつ作用も影響も受けることのない、絶対性そのものの世界とも言えます。

であるなら、ひとまずここでお伝えしたい概念としては、シンプルに一つだけ。その、自分の宇宙の起点そのものに自分の意志をおいて、そこから発する意志で、自分の宇宙を再創造する。

そのイメージをもって、創りたい自分の宇宙を「決める」ということです。

細かな説明を省いたど真ん中の本質論だけなので、ちょっと現実感覚として腑に落ちない方もいるかもしれませんが、原理原則的な概念として、ひとまず自分のものとしておいて頂ければと思います。

次章で、自分と自分の宇宙を「自ら生じ、自ら滅す。」という「自生自滅」の概念の一步先、万象の根源に隠れている普遍的な一つの理（ことわり）を掴むところへと、悟りリテラシーを深めて行きましょう。

もう一步先の扉まで開いてみることで、ここでお伝えしていることの意味も、もう一段、深めていけると思っています。

## 第四章

むすんで、ひらいて -天門開闢-

### ◇上海の思い出とタオの真髄

ここで一息つきがてら、少し別の角度から入って行きましょう。かれこれ十年ほど前のことになりましたが、縁あって上海と杭州に旅行する機会がありました。

当時自分のブログの中で、中国の思想家の胡蘭成という人のことを書いていて、胡蘭成が残した思想・学問の継承発展に取り組む朱さんという中国人がそれを読んで連絡をくれたのがきっかけでした。

胡蘭成は戦前の親日政権の中枢にいたことから日本に亡命し、日本の数学者の岡潔を始め、多くの日本の識者との交流があった人物です。

日本神道への造詣も深く、天地万物の理を説いた古代の中国の叡智をベースに日本神道の本質への思索と研究を深め、伊勢神宮でも講義を行うほどの稀有な思想家でした。

独自に体系化していた「自然学」という学問理論を土台に「文明の悟り」の必要性を説いていた胡蘭成が日本文明に期待したものは大きく、朱さんとも様々な話をしました。その中で、ひとつ印象的だったことがあります。

それは、中国人にとっては、老子のタオの思想が最高峰の叡智だと思う、という発言でした。

私も二十代の半ば頃、老子を理解したくて『老子道德経』を読んでいたのですが、文章の字面は読めてもその奥にある概念が掴みきれず、難儀したことがありました。

天地自然の息遣いを感じるために自然と共に生活する必要があると思って、『老子道德経』

を片手に群馬の高地農家に住み込みで働いて瞑想したりしていたのも、今では良い思い出です。

その後の探求の中で老子の思想の全容が観えるようになっていたので、朱さんとも話もしやすかったのですが、数ある老子の概念の中で最たるものと私が思っているのが、この章の柱となる「**天門開闔**（てんもんかいこう）」という言葉です。

『老子道德経』の上篇、第十章には、つぎのような記述があります。

「**営**（まど）**える魄**（うつしみ）**を載**（やす）**んじ**、**一**（いつ）**を抱きて**、**能く離るること**  
無からんか。

（中略）**天門開闔して、能く雌（し）たらんか。**」

ここで出てくる「**営魄**」の大意は、惑える魂、といったことです。

身体を動かす原動力となる魄（うつしみ）をしっかりと安らかに鎮め、タオの世界そのものと一如になって、その境地から遊離することがないように、という意味合いになります。

そしてその後「天門開闔」の言葉が出てくるのですが、「開」はそのままの意味で開く、オープンする、ということ。そして「闔」は、「閉じる、クローズする」ということです。

つまり、天地の根源、一そのもののタオの世界には、万物が生ずる天の門のような世界があり、それは開いたり閉じたりする作用、働きを持っている、と解釈できます。

天門が「開く」だけなら、万物はそこから生まれたのだという単純な解釈で落ち着きますが、「閉じる」作用も同時に持っている、という点が、ここで決定的に重要なところですが、

老子のタオの思想を語る際、私は、この言葉の意義を最重視して解説されたものをこれまでに聞き出したことはありません。

一般的には老子は、なんとなく仙人のような印象を持たれたり、のちに発展していく道教の独特な世界観と重ねられたりすることがあると思いますが、私はあるがままの老子の真骨頂のひとつは間違いなく、この「天門開闔」の概念を残したことにあると思っています。

ちなみに「道（タオ）」という漢字は、「首」と「しんにょう」の二つで構成されています

が、「首」は始め、「しんにょう」は終わりを意味します。

ちょうど新約聖書のヨハネの黙字録にも、「私はアルファでありオメガである。最初であり最後である。」と、同様の趣旨の記述があります。

始まりと終わりが一如であるということは、始まりも終わりもない世界、不生不滅の世界ということになります。そこから現象世界が始まる時の鍵となる概念を、老子は残しているのです。

#### ◇「門」の悟り

不生不滅を謳う仏教の悟りのエッセンスを象徴的に「空の悟り」とするなら、老子のタオの悟りの真髄は「門の悟り」とでも呼びうるものでしょう。

老子と同じく荘子もまた、「天門」という言葉を残して、例えば次のようなものがあります。

「入出し而もその形を見るなし、是れを天門と謂う。天門とは無有なり。万物は無有より出ず。」

これを、老子の「天門開闔」の概念と重ね合わせて解釈してみましょう。

天門とは、万物の根源にあつて、まだ何も天地の存在が生まれる前の世界に置かれたメタ概念です。

現代風に言えば、宇宙が創造される前、そこには何があり、どんな「仕組み」によって宇宙が創造されたのか、というテーマに繋がります。

現代宇宙論では、無からの宇宙創成論や五次元、真空エネルギー、ゼロポイントエネルギー、ゼロポイントフィールドといった概念が語られますが、そういったものとも重なり合うところ です。

ただ一点、明確な違いとして、「門の悟り」ならではの「仕組み」を明確に規定しているという特徴があります。

それは何かと言うと、「開いたり閉じたり、入ったり出たりしている」という概念です。老子と荘子の言葉とを合わせてみると、よりくつきりとシンプルに浮かび上がってきます。

宇宙がまだ生まれる前の世界を荘子は「無有」とし、万物は「無有」から生じる、と記しているように、「無」から生じる、とは書いていない点は、大事なポイントです。

「無」であれば文字通り何も無いので「無」のままですが、「無有」と謂うことは、完全なる「無」ではありません。

「無いようであるような、有るようで無いような」「無いとも有るとも言えないような」そんな世界。

無いのか有るのか、どっちなのか？という、二元性の次元を超えた、まさしく「無有一如」の世界、それがタオの次元です。

そして、その「無有一如」の世界はそのまま、天門の世界でもある。

天門とは、「開いたり閉じたり、入ったり出たりしている」という動き、流れ、働きを持つ



ちつつも、「形をみるなし」なので、形がなく、形を止めることもなく、形としての境界も持ってはいません。

それは、無境界にして無時間の中で無限に続く「開閉、入出」の動きそのもの、と解することができるとしよう。

さてここで、前章の「自生自滅」の内容の中で出てきた動的平衡のくだりを思い出される方があるかもしれません。

「開く作用と閉じる作用、入る作用と出る作用」という、真逆の流れがひっくり返る動き、時間の無い世界において「同時反転」するさま、それは天地万物が生じる前の世界における、「完全対称の動的平衡状態」と言えます。

その自律的な動きの「仕組み」が万象の根源にあるからこそ、「自ずから生じ、自ずから滅する」という、宇宙やエネルギー、物質、生命に共通する働きを見て取ることができるです。

「空の悟り」というと、なんとなく、空っぽで何もない、けれども虚無的な世界というわけでもない、というような抽象的な直観にとどまりがちですが、そこから五蘊が集まって繰り返すのですから、五蘊を生起させる何らかの「仕組み、理(ことわり)」があるはずで

科学的理性が学術的な角度からそこに迫る道もありますが、学界の統一見解というのは簡単ではありません。

ですからそれはそれとして、一般社会や企業においては、宇宙の根源の概念を端的に「天門」という言葉で喝破し、言い残している東洋の叡智を参照し、そこからアップデートして社会実装につながる方法に落とし込む速度感の方が良いと思います。

かつて量子力学の世界を切り開いた物理学者たちは、波動と粒子の相補性という特性を明らかにする中で、陰陽太極図の世界を知り、東洋思想の中に、共通する宇宙の「仕組み」を見出しました。

後にニールス・ボーアはノーベル賞の受賞後に陰陽太極図を自分の家紋として掲げたほ

どですが、いにしえの直観的な叡智の意義を現代の科学者が再発見し、それを科学の言葉で再解釈し、実社会に生かしていくための知恵とすることは、素晴らしい知の営みではないでしょうか。

重なり合う量子の世界観は、現代においては0か1かの二元的なデジタルの世界の先に、量子コンピュータの社会実装の可能性を開き始めています。

そして、人の意識変容という分野においても、前述のように量子的宇宙観は広く解釈され、様々な形で学びや気づきの体系となり、社会に実装され貢献しています。

同様に、量子のふるまいや量子的な確率の揺らぎのもう一步奥にある基層次元において、「門の悟り」の概念を残した老荘の叡智は、現代科学や現代哲学の文脈においても再発見、再解釈され、実社会に活かされていく道になり得るものだと思います。

それはとりもなおさず、「悟りのリテラシー」を得ることによる、悟りの社会実装の推進力になるものだと思うのです。

#### ◇内と外の同時反転という造化の理

さてもう少しだけ、『老子道徳経』の言葉を拾いながら、解釈を深めてみましょう。

上篇の第五章には次のような言葉があります。

「天と地の間は、其(そ)れ猶(な)お橐籥(たぐやく)のごときか。虚(むな)しくして屈(つ)きず、動(うご)きていよいよ出(い)でず。」

ここで鍵になるのは、「橐籥」という言葉が示す概念です。「橐籥」とはフイゴのことで、風を送って火力を上げるために鍛冶屋が使ったりしたものです。

フイゴの内側は、「虚(むな)しくして」とあるように、実体としては何も詰まっていな  
い、からっぽの世界です。しかし、フイゴの「動き」は、そのからっぽの世界に圧をかける  
ことで風の働きを起こします。

圧をかけて内側の空気を外側に出した後は、すぐに、外側の空気が内側に入ってきてフィゴを膨張させる。その動きを何度も繰り返しながら、徐々に火は強くなり、力強い炎の働きとなって行くのです。

ですからこのフィゴの「動き」のように、天地の存在が生まれる前の世界においては、かたつぽのようでありながら無限にどこまでも尽きることのない世界が広がっていて、その世界は内側と外側を同時反転させながら、一点に圧縮し、また一点から膨張して広がっていく。

そのような「動き」が何度も何度も繰り返されることで、いよいよ天地万物が出ずるようになっていく、という風に読み解くことができます。

このフィゴの例えと、「天門」に象徴される「開いたり閉じたり、入ったり出たりしている」という「仕組み」とが重なり合って同じ一つの概念としてピタッとはまったとき、老子が直観し、伝えようとした世界の妙味を悟り知ったと言えるでしょう。

また老子は「衆妙の門」や「玄牝の門」など、他の箇所でも「門」という言葉を複数回、異なる文脈で使ったりしています。

そのどれもが、天地が生まれる前、宇宙創造の前の一如のタオの世界から、多様な存在、森羅万象が生み出されていく「造化の理（ことわり）」を指し示しているのです。

「門」は構造的に必ず、「門」自体が端境（はざかい）となって開閉し、門の内側と門の外側をつなぐように出来ています。

普通私たちが目にする「門」は、門に囲われた内側と門の外側、というように二分されませんが、タオの世界は二元性の世界ではなく一如、一元性の世界なので、内側と外側といった二元性が成り立つものではありません。

けれども、「内側と外側、開くと閉じる、入ると出る、圧縮と膨張、求心と遠心」といった、相反する真逆の動き・作用を意味するような言葉が、随所に散らばって記述されています。

それでは、こういった老子の言葉、表現とつながるメタ概念としての「門」の世界において、これらの二元的な対立概念をどのように捉えれば良いのでしょうか。ここまで何度か馴染んできたシンプルな概念を使って、こう考えることができるでしょう。

それは、「即」という関係性でつながること。イコールの関係性にしてしまうことです。

つまり、内は外であり、外は内。

開くは閉じるであり、閉じるは開く。

入るは出るであり、出るは入る。

圧縮は膨張であり、膨張は圧縮。

求心は遠心であり、遠心は求心。

これらは通常の私たちの分別の思考では言語矛盾にしかありませんが、ここまで見てきたように、二元性の先にある一元性、しかも「同時反転」の「自在性」というメタ概念までを取り入れた「即」の概念による理解は、十分に悟りリテラシーとして成り立つでしょう。

真逆の世界、真逆の動きが「即」、同時に成り立つところ。どちらでもあって、どちらでもないところ。それが「門」に象徴される老子の悟りの境地と言えます。

例えば実際に建造物として建っている門の真ん中に、自分が立ったと想像してみてください。さい。

そこは、内と外をつなぐところであり、内が外に、外が内に反転するところ。そうでありながら、内でも外でもなく、内も外もないところです。

天門の中心は、開くと閉じる、入ると出る、圧縮と膨張、という働きが、無限に「動的」でありながら完全な「平衡」の状態となっている、「完全対称の動的平衡状態」「動きのない動きそのもの」のようなところなのです。

#### ◇ゼロと無限大の数理

陰陽太極図のところ、陰陽二元の世界が生じる前の「太極」の次元は、象徴的には真円や真球のような幾何学的な絵図として描かれる、という内容があったと思いますが、禅における「空相」、「一円相」と呼ばれる一筆書きの円の絵もまた、タオに通じる世界を指し示していると言えます。

そしてその世界では、内が外であり、外が内であり、内も外もない。

同時反転の動きそのものでありながら、その動きもない。

それを「天門」と表現したことが、老子の独自性である、ということになります。

内と外の同時反転は、イメージとしては老子の例え通り、フイゴのようなもので、より身近な例えで言えば、呼吸のリズムです。

肺の内側に空気が入って、ひっくり返って外側に出る、その集散の繰り返しの仕組みと同

じようなものです。

内には何も無い空っぽのような真円の相は、同時に外に無限に尽きることはない広がりを持った世界でもあり、その世界は、自律的な動きにより、空間的な位置も質量も持たないゼロの一点（門）に入って無限に収縮する。

すると今度は逆にひっくり返って、内に何も無いゼロの一点（門）から出て、外に開かれ無限に広がる。

真逆の動きがひとつなったその作用がどんどん繰り返される程に、そこから妙（たえ）なる造化の作用によって、多種多様な存在が出ずるようになる、と。

これが、老子を「門の悟り」の人物と位置付けた時の、もっとも基本的な特質です。

では、このような直観的洞察から、宇宙創造のその一点を指して老子が「門」といった世界を、現代的に表現するとどのようになるのか。

現代物理学と数学において、宇宙の根源に隠れた万物の理論として実証されたものがあるわけではなく、これが普遍絶対の答え、と提示できるものはありませんが、物質や力、エネルギーなど実体を扱う実験物理の枠を超えた次元ですので、理論物理、つまり数理、数式の世界のみが唯一、そこに手をかけうる手段となるものでしょう。

ここでは、タオや空、あるいは宇宙の創造に関する理論を展開する上で数理的に必ず登場してくる、「**ゼロと無限大**」という概念に少しだけ触れておきましょう。

私の知る限りでも、「ゼロと無限大」の関係性を数理、数式にすることで悟り領域の世界を理論化したり説明しようとされている方が何名かいます。

現代社会では情報知識の伝播が即座に起こりますし、ある意味で集合的無意識のように、「ゼロと無限大」の数理についての議論、検証が進んでいく時代に入ったとも言えると思います。

本章の老子の「天門」の概念と重なるなら、有限の空間や時間という四次元的な概念が生

まれる前のタオの世界は、無限に小さく大きさない一点（ゼロ）に、無限大の圧縮と無限大の膨張が同時反転で重なり合う、「ゼロと無限大の動的平衡」の世界、とても言い表せるかと思えます。

言語だけでもってこの世界の概念を共有するにはどうしても難しく感じられると思いますが、ゼロから無限大に大きくなり、無限大からゼロに小さくなる、しかも無時間の次元なので、その動きに時間はかからないため、反転しているけど反転していない。

あるいは、無時間世界における無限大の遠心と求心の同時反転作用、といった捉え方もできるので、自分にじっくりくる角度から、その独特なメタ概念を掴んでみて頂ければと思います。

物理学では、宇宙の統一理論を目指して、ミクロ世界とマクロ世界の二大理論である量子力学と相対性理論を統合しようとする、無限大という値が現れてきます。

あるいは、宇宙の始原まで立ち戻ろうとして全ての物理量を一点に集約すると、やはり、

無限大という概念と向き合わざるをえず、宇宙の向こう側に抜けるための特異点を越えることができません。

また、宇宙の中で力の法則を司る四つの力（重力、電磁力、強核力、弱核力）を統合すると、やはり理論上、真空中に無限大という概念が出てきます。

現象世界を起点として存在や力の本質を統合的に明らかにしようとする、どうしても無限大の壁に阻まれ理論が発散してしまいますので、ここでひとつの提案としては、発想を一八〇度転換してみる、ということが鍵になります。

それは老子が語るように、そもそも宇宙の全ては、宇宙が無いところから生まれているのだから、そのまま素直に、宇宙が無いところを起点において、その世界を直観的に掴んだであろう人が残した叡智を補助線として、理論と概念を組み立ててみる、ということになります。

すると、そもそもなんの存在も境界もない一元性の世界から全ては生じた、という前提の

もと、つまりはゼロの世界を全ての思索の起点とすることになるでしょう。

しかし、ゼロはただ何も無いという意味での、完全なゼロではない。

そこから創造が始まるのだから、人間が通常は認識しえない何らかの働きは隠されている。

そこで、「天門」の概念を手掛かりとしてここまで見てきたような理解が成り立つのです。無であり無限というその世界は、ゼロのポイントに無限大の収斂と無限大の発散のエネルギー作用が同時に起こるため、無限の変化をしていると同時に、その作用が相殺されて何の変化が無い状態でもある。

ゼロの一点にプラスの無限大とマイナスの無限大が動的に畳み込まれながら平衡している完全対称の崩壊は、物理学でいう対称性の自発的破れとなり、そこから生じるエネルギーバランスのズレが、二元性、多様性の世界を生み出していくようになる。

そのように造化の理を解することで、多様な知的領域を柔軟に横断しながら、専門知も含

めた総合知として悟りの概念化を精緻にして行くことが出来るでしょう。

最初から細部にこだわらず、大きな括りでの共通了解を確認し合っていくことで、社会貢献できる実用性の高い智慧へと昇華し、活用していく道が広がると思います。

#### ◇ひとつの山、ひとつの頂上

さて、ここまで、概要としての大まかな横断の仕方ではありますが、様々な分野の智慧を引き出し、解釈しながら、それぞれの言葉や表現の奥にある悟りの概念を、段階的になぞってきました。

良く言われる例えですが、山に登るとき、登山道は様々でも、頂上は一つしかありません。悟り、あるいは真理を探究し説明する道も、当然ながら一つではないし、一つである必要もないでしょう。

しかし、自分が登ってきた道や自分が見てきた景色はその人の認識世界にとっては価値のあるプロセスであり、必要な学びや登頂への必須条件のように感じやすいため、どうしても自分の学びや経験に固執してしまうきらいもあります。

私も自分の実体験上、この道がベストだと思っていたのですが、実際のところ、人の好みが十人十色であるように、悟りの道も人それぞれです。

例えば効率の良い最短ルートを進むのが好きで、それで頂上に一番乗りした人がいたとして、それはそれで素晴らしいですが、それとでも、その人の道の歩み方でしかありません。その道を教えて欲しいという人がいたらぜひ共有したら良いと思いますが、その道に関心や魅力をあまり感じない人に、いくら素晴らしい道だと喧伝しても、それはやはり伝わらないでしょう。

その人からしたら至極遠回りに見えるかもしれないとも、ゆっくりと途中の草花を愛でながら休憩したり、時に悪路に苦しんだり、挫折そうになりながらも、意志を貫き晴れやか



な最高の気分で頂上の感動を味わう人もいます。

それぞれの経験は完全にその人のものであって、自分が登った道は自分にとっては最高の価値を持つものだったとしても、それは相対的なもので、誰にとってもそうであるとは限りません。

ただ、同じ山を登る人への敬意と、同じ道を進んでいるならお互いが手を差し伸べ合う心はとても大切だと思いますし、頂上まで登りきったら多様な登山道が見渡せるでしょうか、また他の道から登ってみて、その道ならではの新たな醍醐味を味わう選択肢もあります。そうして自分の経験やプロセスはこれから登る人への参考として伝え、先に登った人よりも登りやすくなるためのガイドになれば、多くの人が、より多彩な選択肢と経験の中で、その人ならではの悟りの道を楽しめると思います。

もう一つ、非常に大事なことがあります。

それは、悟りへの道は、それがどんな素晴らしい智慧や方法であれ、最後の最後には、全てを手放す必要がある、と言うことです。

彼岸に渡る船は川を渡るためにあり、梯子は高みに登るための道具に過ぎないように、船や梯子に後生大事にしがみついていることは、その道具の本質的意義をむしろ損なうことになるでしょう。

その船や梯子、すなわち悟りに至る智慧や方法がいかに素晴らしいものであっても、それはそれで、人間世界の一つの価値づけと言う領域での話なのです。

その道具を作った人に、その道具に、その道具の恩恵に心からの感謝をしつつも、最後はそこから自在になれたかどうか、真実の意味でその悟りの道への報恩につながると思えます。

なぜこのようなことをここで言うかという点、一つには、これから意識変容や悟りへの関心とリテラシーの水位が高まるであろう時代状況の中で、やはりどうしても、特定の学び、

特定の教え、特定の組織といったものへの執着やお互いへのジャッジメントが起こりかねないと思うからです。

すべてはひとつであるとは分かっていても、どんな素晴らしい叡智を悟っても、人類の根っこは皆同じひとつだとわかれば平和になるだろうと期待しても、それだけでは現実社会に真に有用な智慧にまでは落とし込めないと私は考えています。

人間の分別知は自己を中心に相対比較して価値付けをするクセを持っていますから、四次元世界の中にあって地球上の人間のその本性（ほんせい）が一〇〇％解決すると考えるのは、いささか楽観的に過ぎるでしょう。

だからこそ、悟りの智慧を活用するこれからの時代にあっては、互いの独自性を許容し、オープンに学び合うことで、全体としての進化発展をより加速できる「共創の姿勢」が、より大切になってくるでしょう。

同じひとつの山に向き合い、同じひとつの頂上に向かって登っているのですから、悟りの

世界という大きな知のプラットフォームを共有している心で、様々なアプリケーションを提供しあっていければ、素晴らしい未来に繋がると思います。

#### ◇わらべ唄と真理の遊び心

だいぶ理屈っぽい話が続いたので、ここで一つ、感覚的な軽い例え話を入れてまとめて行きましょう。

日本人ならおそらく誰もが歌ったことのある、「むすんで ひらいて」というわらべ唄がありますね。

♪

むすんで ひらいて

手を打って むすんで

またひらいて 手を打って

## その手を上に”

最後の「その手を上に」は、遊びの中で「その手を頭に」とか「その手を胸に」など、あちこち自由に変わります。この日本のわらべ唄と、本章の柱として深めてきた「天門開闔」を紐づけてみましょう。

天地が生まれる前の世界は、ゼロと無限大の動きだけがある世界。

そこに形は何もなく、何も無いようであり、ただ動きだけがある世界。

そこから次元がひっくり返って何かが生まれる時、圧がかかって対称性が破れ、最初のエネルギーが結ばれます。

唄で言えば、最初に両手のひらが開かれたところから、中心のゼロの一点に「むすんで」の働きが起こりますね。

しかしその結びは反転してすぐにほどかれ、全方位に「ひらいて」になります。

その次、「手を打って」は、ちょうどかしわ手を打つ感じですが、右と左という相反する方向から中心のゼロ点で摩擦が起き、音が響きます。

「無音の音」の世界から「音」が生まれる。ゼロ振動の世界から振動が生まれる瞬間です。

そのエネルギー振動は最初は不安定ながらも、波動となり、粒子となり、現象化して、最初とは違う存在次元での「むすんで」の作用につながって行きます。

そして、それもまた瞬時に反転し、「またひらいて」ゼロにリセットされますが、すぐさま次の「手を打って」へと反転します。

一つの唄の解釈ながら、結んだり開いたり、閉じたり開けたり、対称性を連続的に崩したりと、シンプルな「動き」の中から、多様な存在を生み出していく「理（ことわり）」が隠れているようで、なんとも軽やかです。

そして、このわらべ唄で一番大事なところはどこかと言いますと、唄の最後の「その手を

上に」にあたるどころ。

ここだけは、それぞれ自由に楽しく、自分の好きなところに手を持って行っていいのです。

みんなに共通しているルールと、自在な意志を楽しめる「遊び」の隙間。

この両方が一つになって、ここまでお伝えしてきた「悟りの智慧」と重なり合っているのが、感覚的に感じ取れるのではないかと思います。

この現実が、脳の働きを中心とした仮想現実、あるいは四次元の映画のストーリーのようなものだとしましょう。その中で設定されたキャラクターを、日々、そういうものだと特に疑わずに演じていた自分。

ところがある日ふと気がついてみると、どうやらこの現実、このストーリーの中で固定されて不自由な思いをしている自分は、「本来の自分」ではない気がする。

深く探求し、心を鎮めて悟りの智慧を開いてみれば、その映画、ストーリーは自分が作ったもので、自在に書き換えられる可能性が充分あることに気づいてしまった。

さて、ではどうしようかと。

宇宙の始原に隠れた普遍的なルール、「真実の理（ことわり）」を悟り知り、その上で、自らの意志で、どんな映画を再創造するかを「決める」こと。

前章の最後でお伝えしたように、自らが生み出す変化の可能性は常に、意志をどこに、どう置くかにあり、何をどう「決める」か、にかかっています。

自分が脚本、演出、主演する現実映画の中での遊び心をどこに向けるも、自分の自在の意志ひとつ。

そうであるなら、真理の遊び心を持って、これから現実世界にどんな意志を広げていくか、その最後の扉を、最終章となる第五章と一緒に開いて行きましょう。

## 第五章

### 経営者が歩む悟道 ―入麿垂手―

#### ◇ダマヌールと縄文

二〇一九年の夏、ご縁あって北イタリアのダマヌールを訪れる機会に恵まれました。トリノの北に行くこと五十キロ、美しい自然に囲まれたその地は、持続可能な社会モデルとして二〇〇五年に国連から「グローバルな人間の共同社会フォーラム賞」を受賞。

欧州最大のスピリチュアルコミュニティでありながら、イタリア政府公認で独自の通貨まで発行しており、ダマヌールならではの高度で多彩な学びの体系も有しています。

人によって都市伝説のように捉える方もありますが、古代のアトランティスやム

ー大陸があった時代の文明の叡智を継承しているということ、実際に数日間滞在し、色々なものを見聞させて頂く中で、刺激を受けるものがたいへん多くありました。

現地の人との交流の中で、日本とダマヌールは精神性において親和性が高いんです、という口にする方々がいたのが、私にとっては非常に印象的でした。

また、本書の背景にある私の問題意識の一つが、「個の悟り」の時代から、「集団の悟り」の時代に入っているということにありまして、その観点からしても、考えさせられることが多かったです。

第五章の初めに改めて確認しておく、本書は、個人が体感的な自分の悟りを得るための方法論や智慧をお伝えするものではありません。

むしろ、従来の悟りに対する固定観念からしたら正統ではないとしても、「悟りの概念」をリテラシーとして共有することに主眼を置いています。

そして、その智慧を生活や仕事の中で深め、人生という実践の場そのものに実装し、公の

社会に貢献できることを目的にしています。

人間は共同体を作り、集団で社会性を持って生きる存在です。

その中で、ベクトルをただ自分の内側に向けて悟りの探求に沈潜する「個の悟り」ではなく、それも含め外側の世界の発展にいかに関与できるかという、内と外を包み込むバランス感を持った悟りの道が大事ではないかと思っています。

その前提に立った時、人は必ず、他者との関係性を持って、共同体の中での自分の役割と向き合いながら生きている、という事実の確認が、まず大切になるでしょう。

それは生まれながらの最小単位としては家族であり、長じては職場になり、もう一つ広がったところでは地域コミュニティになります。

ダマヌールは独特のコミュニティモデルの中で、瞑想や自己統合を中心とした「個の悟り」の探求や学びもしていると思います。

並行して、共に生活を営む仲間やコミュニティ全体がより良く発展するように、そしてダ

マヌール全体が地球というコミュニティにいかに関与できるかということに、日々取り組んでいるようでした。

日本で同様のモデルを作るとは色々ともつかしい面もあると思いますが、共通認識としての悟りの学びを持ちつつ、それぞれの役割を持って共同体に参画し、その共同体そのものが社会に貢献するための取り組みを促進する、ということは十分に可能でしょう。

日本でそれに近いところとして、私の知る中では、鎌倉がそういう意味での先端的なコンセプトをもって、行政も含めた取り組みに当たっているようです。

ダマヌールや鎌倉のように街単位での取り組みとなるとハードルは高いと思いますが、個人ではなく共同体で、すぐにでも悟りの智慧を共有して社会貢献に当たれる共同体があります。

それこそが企業組織であり、既に現実社会の中で直接的に営利団体として活動する事業体の中に、悟りの智慧、悟りリテラシーが実装されることは、その組織の緩やかな変容にと

どまらず、ステークホルダーはじめ実社会への貢献、そして変容へとつながって行きます。

個人と法人組織ではその影響力が比較にならないため、悟りの智慧が実装された法人、とりわけ企業組織が社会に与える変化は、これまでの個の悟り探求やスピリチュアルブームの時代と一線を画して、新たな次元へと時代を牽引する力になりうるのではないかと思います。

そのようにして、社会を構成する個人と共同体の双方が相乗効果を持って意識変容の速度を加速させて行くと、その延長線上として自然に、文明的な視野間でのパラダイム転換論と接続する議論になって行きます。

日本文明の根幹には一万六千年前から始まる縄文文明があり、昨今、縄文文明に対しての言及は、歴史や考古学の見地からだけではなく、ビジネスや経営、世界情勢の方向性と絡めた視点としても、各専門家から聞かれるようになりました。

そういったものを見聞きしてみると、縄文文明の特質には、本書でここまで見てきたよう

な悟りの世界との親和性を感じられるものが多々あります。

古代の叡智に学び、それを現代風にアップデートして未来の創造に向かう、というコンセプトを文明的な視野にまで応用したとき、私たちが生きる社会の今後の方向性についても、縄文的な世界観からは、貴重な羅針盤が得られうるのではないかと思えます。

#### ◇全集中、宇宙の呼吸。一の型、螺旋。

ダムヌールと縄文のわかりやすい共通点の一つに、螺旋の文様があります。

ダムヌールで実際に私が体験させていただいたものに、地面に石を螺旋状に並べて敷いたサークルをなぞって歩く、森の中での瞑想がありました。

石の螺旋状にゆっくりと歩き、螺旋の中心にある木に触れて意志を通じ、そこで静かに目を閉じ、短い時間ながら瞑想のときを持ちます。

そして同じ石の螺旋をまたゆっくりと逆に回って戻る、という、シンプルですが大変心地よいものでした。

ダムヌールではあちこちに螺旋状のストーンサークルがあるのですが、螺旋状の「流れ」は宇宙の最も基本的な創造と破壊の原理を象徴していて、それは日本はじめ世界各地の文明の足跡に確認できます。

中心の一点からスピニングする「流れ」を持つ、という点で見れば、超ミクロの素粒子の世界や原子構造に始まり、DNAの二重螺旋構造、人体の指紋やつむじ、竜巻や台風、渦潮といった自然界の原理、ひまわりの種子の並びや巻貝の構造、地球の電磁場の流れ、太陽内部のエネルギーの対流、銀河系の構造まで、共通した仕組みを持っているのがよく分かります。

それらは数理的な分野でも様々に言及され、もう十年ほど前になりますが、「スライブ」

という動画が流行ったときに「トールラス構造」という数学的なエネルギー循環構造のモデルも広く知られるようになりました。

このように視覚的に確認しやすい現象としてのスピニング、回転、螺旋の構造はもちろん大変興味深く面白いものですが、より大事な本質は、その奥の次元の方にあります。

それは何かと言うと、そういった全ての回転運動の「中心」のことです。

あらゆる回転、あらゆる螺旋には、それ自体は肉眼で視認できない「中心」が必ずあります。

合気道をはじめとした武道の深い境地に達した方の一つの共通点は、その真空状態とも言えるゼロの「中心」あるいは「間」から、いかに身体性としての「流れ」を扱うか、というところにあるのではないかと思います、それとも共通します。

完全に力を抜いたゼロの脱力状態から自在に、左右の「動き」「流れ」を無限に繰り出す。



そして、左右の「動き」「流れ」を生み出している時も常に、「中心」を失い、ブレることはない。

身体感覚としてのこの「仕組み」は、実は人間の基本的な「心の理（ことわり）」においても同様で、感情のアップダウン、浮き沈みや、ポジティブ・ネガティブ思考といった相反する「動き」「流れ」の中で、「中心」「中庸」を持つことの重要性が説かれることも同じです。

そしてこれらは実のところ、全宇宙の存在に基本的に共通している「仕組み」なのです。

ここで、第四章までの内容で様々な表現で出てきた共通概念を思い出して頂きたいのですが、そもそも宇宙が存在する前、「天門」が開いたり閉じたり、入ったり出たりする、「完全対称の動的平衡状態」がある、という話でした。

その「動き」「流れ」は中心のゼロの一点に収斂し、そこから同時反転して発散する。その究極の根源の一点を、直観したか、していないか。

それが「門の悟り」の真髄でした。

同時にその門は、「閉ざされた四次元世界と開かれた五次元世界」を同時反転して繋ぐ「門」であり、「宇宙の中と宇宙の外」を同時反転して繋ぐ「門」でもある。

それはまた、二元性と一元性を繋ぐ「門」でもあり（不二不二）、現象の生成と空の次元への消滅を繋ぐ「門」（自生自滅）でもあります。

さらに、もう一つ思い出して頂きたいのは、脳の認識作用が生み出すこの仮想現実の世界において、自分の宇宙を自分で再創造するための最重要のポイントは、この「門」にあたる宇宙の起点から意志を発するイメージで、自分の意志を「決める」ということでした。

老子はもちろんここまでのことは言っていませんし、『道德経』の中に螺旋の型を示唆する記述は見られません。

しかし老子は、「天門開闔」という、天地の造化の理については、明確な概念を残しました。

感覚的な表現として、それを全宇宙の「呼氣と吸氣」の繰り返し、宇宙の呼吸だとするならば、呼氣と吸氣を司る共通の一点から生まれるエネルギー場の「流れ」が、螺旋の型です。

ミクロ世界からマクロ世界に至るまで、全宇宙は常に「動き」「流れ」の只中にあり、全宇宙の全集中の呼吸は、最も基本的な一つの共通の型として、螺旋文様を現象世界に刻み込んでいるのです。

そして、この宇宙の呼吸と流れるような螺旋のエネルギーを感覚的に掴み文化文明の中に実装しているのが縄文以来の日本の悟りであり、ここまでたどり着いてようやく、第五章の柱である「入塵垂手（にってんすいしゅ）」の悟りリテラシーへの扉が開いて行きます。

#### ◇日本の「間と結びの悟り」

「入塵垂手」とは、禅の悟りを十段階の物語と絵図で示した「十牛図」という教えの一番最後、第十段階に出てくる言葉です。

ここまでの内容と大まかに繋げていうならば、本質的な悟りの智慧を得た後に、それを持ってどう生きるか、現実世界とどう向き合うか、ということになります。

「垂手」とは、ぶらりと手を垂れること。悟りの智慧を得た後で、手を開きさしのべ、人々と悟りを共にし、安らぎを与えることにあります。

そして「入塵」は、再び世俗に入ること、というような意味合いで語られますが、「入塵」の「塵」とは、ずばり「市場」のことを指します。

ですから世俗に入るとは、直接的にいうと、「市場」つまり経済活動の真っ只中に入り、人間の最も俗な側面が現れるその世界の中においても、悟りの智慧を広げ、共有し、人々と世の中に貢献することが十牛図最後の教えである、という解釈につながられます。

ここにあつてピタリと、序章でお伝えした本書のテーマである「悟りと経済（お金）」と  
いうことが重なり合います。

そして、経済活動の主体である企業と、企業経営の意志決定と責任を担う経営者が、いか  
にして悟りの智慧を現実社会に実装するか、という挑戦へと接続していくのです。

実際の十牛図の教えの歴史において、悟りと経済活動、企業活動というものをリンクさせ  
て真正面から取り組んだ事例があるのかどうかは分かりませんが、そういう意識を明確に  
組織として共有し、全社的に取り組んだような話は寡聞にして知りません。

近年の有名な一例としては、ステイブ・ジョブズが日本の禅僧からも学んだ禅の教えを  
事業に反映させていた、という話があります。しかしアップルという会社が全社的に悟りの  
智慧を共通概念として持っていたわけではありませんので、ここでいう組織共同体として  
の悟りのモデルには当たらないでしょう。

また組織論的に振り返ると、序章で触れたテイルのように、テイルを超えた先のモデ  
ルが「集団の悟り」としての「入麴垂手」の新たな意味合いになります。率直なところ、こ

れは前人未到の領域でしょう。

これから時代が進むにつれ、イノベーター、そしてアーリーアダプターたちが試行錯誤し、  
模索しながら結実させていくモデルが新しい常識を牽引していくと思います。今がちよう  
どその端境期に入ったところではないかというのが私の感覚です。

そして、その新しい世界を開拓する上で、縄文以来の日本の文化文明を背景とする日本人  
には、様々なアドバンテージがあると私は思っています。

日本的な悟り、ということをはひと言で言い表すとしたら、「空の悟り」「門の悟り」ときて、  
「間と結びの悟り」という概念が、今のところ私には一番しっくりときています。

とはいえここまで見てきたように、「ひとつの山、ひとつの頂上」なので、本質的にはど  
れも同じものなのですが、伝え方やどこに力点を置くかのバランスは、それぞれ微妙に違  
います。しかしその方が、多角的に同じものを深められるので、気づきの幅が広がりやすいで  
しょう。

ここでいう「間」は老荘のいう「門」と基本的に同じ概念です。それでいて、「間（ま、あいだ、はざま）」という概念ならではの特徴もあります。

ちょうど漢字の作りから見ても、「門」の中に「日」が入ると「間」になります。

「門」を、ゼロと無限大が一如となっている真円、真球のようなイメージだとすると、「間」の元の字、つまり「日の元」の世界に当たるので、ことば遊びながら、宇宙の始原を指す概念としては面白い符号になります。

日本の言霊的な考え方でいくと「ヒ」は「日、光、霊、一」等と、どれも「ヒ」の音を当てられますが、これらはどれも現象世界の中の概念なので、「宇宙の中」の次元になります。

例えば愛の光に包まれるような感覚でワンネス体験をする方があるかと思いますが、それはそれとして、「ヒノモト」である「門」の世界は、光や霊性、一、二、三…（ひふみ）という生成の奥にある、「宇宙の外」の根源の世界です。

老子はこの世界を指して、黒より黒い漆黒、という意味で「玄之又玄」という表現をしています。光を生み出す漆黒のゼロの一点が「門」であるなら、そこからその一点にかかる無限大の圧の作用によって「結び」が起きるのが、「間と結び」の意味するところです。

ちなみに「日」という表意文字のものと象形は、「丸の中に点」が入ったものです。元々は太陽を表す丸の中に、空洞ではなく中があるという意味で「点」が入れられた、という説があります。

これを五次元の「門」の世界の中の仕組みに置き換えて解釈するとしたら、黒より黒い漆黒の輝きの中は空洞ではなく、そこには天地万物を生み出す「間」があり、その「間」から生じる「結び」の働きの結果、超微細なエネルギー振動からマクロスケールの現象までの造化が起こっている、という全体観になります。

「点より小さい点」から無限創造の結びの働きを起こすのが、日本の「間と結びの悟り」と言えるでしょう。

付言しておく、日本哲学を思索し続けた西田幾多郎は、ここでいう「間」のことを指し

て「絶対無の場所」という概念を残していたようです。

色と空、四次元と五次元、二元と一元を結ぶ「間」の世界は、ここまで見てきたように矛盾律が同時反転で成立する「即」の世界でもあり、西田の有名な「絶対矛盾的自己同一」の概念とピタリと一致するのではないかと考えています。

この混迷の時代、日本人にとつての日本哲学を再考し、再構築する上で、このあたりのことは今後ご縁ある方と議論を深めつつ精緻化し、社会の役に立てていければと思います。

#### ◇「決める」力、意志決定能力の進化

そろそろ本書もまとめに入って行きましょう。

ここまで「悟りリテラシー」ということで、あまり部分に入り込まずに悟りの世界の全体像を概観してきました。

本書の内容を一つの参考材料とし、より深い探求や疑問点の追求などを通して、自分にと

って意味を感じるところから、何かしら活かして頂ければと思います。

もっとも、悟りの世界そのものが抽象度がメタレベルのもので、個別具体的な知識ではなく普遍的な智慧を扱っているので、実際にはすぐさま企業活動の現場に落とし込み、数字業績やマネジメント、事業計画に反映させられるものではないかと思えます。

具体的に自分ごととして落とし込むためにはそのためのワークや時間が必要ですが、テーマ設定をし、気づきを深めたり、人とシェアしたり自分なりに整理する時に、大事なポイントがいくつかあります。

私が研修をする際にもいつも重視して口に出していることなのですが、まずもつとも基本的で大事なことは、変化の方向性を「意識化、言語化し、共有し、コミットメント（実践する）」といった一連の要素です。

こういったことは、どういう内容にどこまで時間をかけて取り組むかにも異なりますが、悟りの智慧の活用の一例として、その意味合いを簡潔にまとめてみたいと思います。

まず、自分の宇宙を自分で再創造し、変化を作っていく上で、あるいは社員スタッフ、仲間と共に会社で悟りの智慧を活用する時に、最も簡単で最も大事なことは、「意志を決める」ということになります。

これについてはここまで何度か言及してきました。

もちろん普段の生活の中でも人生の中でも、私たちはその都度いつも、何かを「決めて」生きています。

付き合う人、進学先、住むところ、結婚相手、職種、仕事、人生計画などなど、最終的に自分が「決めて」こなかったものは、何一つとしてないはずで。

その意志決定に当たって、周囲の人の意見や影響、自分の置かれた状況や時代環境など、なにか外の要因の結果そうなっていたから、自分が「決めた」ことではない、と思うものもあるかもしれません。

しかしそういった要因があったとしても、自分の最終的な「意志決定」に至る過程をよく

よく見ると、それらは単に、最終的に「決める」意志を発する直前まで、周りを取り巻いている「場の状況」に過ぎないのです。

これは第三章で触れた、自由意志と因果律、あるいは運命論、といったテーマにも重なるのですが、細部はさておき最も基本的で重要な一つの結論は、宇宙の起点に意志を置いて「決める」ということでした。

なぜなら、そこがあらゆる創造の源だからです。

そして思い出して確認して頂きたいことは、その宇宙の起点は存在も時空間も生まれる前、さきほどの日本的な悟りの概念でいうなら、「間」の領域です。

その「間」の働きを量子論的に紐づけると、そこは不確定な量子揺らぎを起こす、根っこの根っこの領域と位置づけられます。

ということとは概念的な理解の道筋として、その「間」から発動して作用する意志こそが、量子世界を確定させ、安定させ、現象化させる、根源の要因である、ということになるのです。

これは言葉を変えると、自分の「意識」を含め、自分の宇宙の時空間全てに満ちる情報場に対して主体的な意志を発し、指示を発し、現象化させる、ということになります。

たんに理屈のように聞こえるかもしれませんが、実際のところ、これまで見てきた悟りの智慧を総合的に踏まえた時、最も本質的な意志決定の「仕組み」は、このようなものになるのです。

ただ、第三章でも触れたように、現象世界においては自分の無意識領域を含め、有時間の中で多様な要因も働くため、それらと向き合い整理していくことは、意識変容の必要プロセスである、という事もまた事実です。

そういったことも含め、悟りの智慧を現実生に生かす最初の鍵は、一言で言うならば「**意志決定能力の進化**」と言えるでしょう。

#### ◇「間」の律動と創発、時間の量子化

普段何げなく行なっている意志決定が自分の人生を創っているのであれば、その能力をどのようにして高められるのか。

表層的な因果律の中で「場の状況」に流されているときの意志と、時空間の制限や、無意識や情報場の影響を受けているときの意志。

そして、宇宙全体のエネルギーをピシッと確定させる、「間」から発する意志。それぞれ階層が異なります。

なぜ「**意志の階層**」が大事なのかを深めるために、「間と結びの悟り」の文脈で、一つイメージを共有したいと思います。

複雑系の議論の中に「**創発**」という概念があり、その要点は、ある階層と階層の間で「何らかの要因」が働いた結果、予測範囲を超えた性質が現れる、というものです。

例えば、なぜ無機的な物質の階層から、有機的な生命が生まれるのか、と言うことですね。

すぐく身近な例えでいうと、逆上がりがずっと出来ずに失敗を続ける階層から、ある時、ふっと回転出来て成功してしまう、そのブレイクスルーの間に働く作用のようなものです。私たちのこの宇宙は、マイクロからマクロまで、あるいはエネルギーや物質、光といった存在のそれぞれの性質であれ、入れ子状の階層性を有しています。

ある階層から、なぜ全く異なる性質の階層が生まれるのかよく分かっていないのですが、本書のここまでの概念で解釈するなら、まさしくそれは「間と結び」の働きによるもの、と位置づけることができます。

例えばどんな外科の名医であっても細胞の中にメスは入れられないように、どんな科学理性であっても、定量性の向こうにある「間」の領域には切り込めないのではないかと思います。

その不可思議な「間と創発」という要因は、先述のようにマイクロからマクロまで螺旋のエネルギーの流れが相似性を持つてあまねく時空間に広がるこの宇宙の中において、螺旋の

中心の「間と間」を結び合わせる律動性を持って、時空を超えた相互作用を起こしようと仮定できるでしょう。

なぜなら、螺旋の中心の「間」は五次元に抜けられるため、四次元世界の特定の時間、空間の制約を受けないからです。

概念的な理解としては、「間」は螺旋の中心にあるとも言えますが、その時空間に固定されているわけではなく、時空を超えた五次元世界と自在に往還するので、「間」と「間」の相互作用も時空間の制約を受けない、ということになります。

量子論では量子トンネル効果や量子テレポーテーションといった、古典物理の枠を超えた研究がなされていますが、近年の時間論における「時間の量子化」という概念も含んで考えると、非連続でとびとびの離散的エネルギーを生滅させる量子揺らぎの「間」がやはり、重要な鍵であると考えられるのではないかと思います。

そして、ではその「間」はどこにあるのかというと、視覚的に分かりやすい螺旋の中心だ



けでなく、「自生自滅」の概念で見えてきた通り、実はあらゆる存在の生滅作用の「間」に隠れているのです。

このあたりちよつと掴みとるのがむつかしいかもしれませんが、本書でお伝えしている全体的な「悟りの智慧」から導かれる一つの結論を言いますと、

「間」は至るところに無限にあり、時空を超えた五次元の無時間、無限時間の中で作用しているけれど、同時にどこにもない。

ということになります。

と言われても、何とも雲をつかむような感じがする……という方は、試みに次のことをイメージとして自分の中に落とし込んでみてください。

自分の宇宙の創造の起点である「間」から発した意志は、質量も持たず、時空の制限も受けずに、全宇宙に満ちる「間と間」と結び合い、響き合いながら現象化し、その発した意志の通りの現実を創造している、と。

いふなれば、意志という名の「糸」が、無数の針の「間」を芸術的に通過しながら、自分の宇宙という名の情報場の織物を結び合わせるような感じですよ。

現象の自分の宇宙を織り成す「意志の起点」を自覚し、なんとなくのイメージからでも良いのでそこに意識付けをすることで、次第に何かしら変化が起こっていくかと思えます。

再三の確認ですが大事なことは、自分の意志を「決めて」自分の宇宙を再創造するとき、「宇宙とつながる」意識ではなくて、「宇宙の外とつながり、宇宙の内、外を結ぶ「間」から意志を発する」という概念を持つことです。

ちなみに私がご縁あってプロジェクトに参画させていただいた、甲府に本社を置くデータム・グループでは、ここでお伝えしている内容に繋がる世界観を、全く別の表現と概念体系でもって社会に実装し、素晴らしい社会貢献をされています。

かつて宮中祭祀を司っていた「白川伯家神道」の伝統を継承し、「言霊（げんれい）学」という日本独自の深遠な叡智を現代のデジタルテクノロジーに落とし込んで装置化したそ

の事業内容は、世界に類例がありません。

縄文以来の日本の深い叡智と、かつて天皇だけに伝えられていたという神道の真髄、そして時代の先の先を牽引するロゴストロンという独自の技術が有する可能性に、たいへん多くの方が関心を持たれています。

こちらの無料のコラム配信やメルマガを始め、様々な社会実装の叡智を世に送り出していますので、ご興味があればぜひいろいろ検索してみてください。

下記は、私のインタビュー記事ですが、リンクした有益な情報にアクセスできます。

<https://eclair.network/?p=4182>

#### ◇悟りの智慧を「自分ごと」に具体化する

ここで本章の柱、「入麴垂手」に再度立ち返って、三つのことを確認しておきましょう。まず本書は冒頭からお伝えしているように、「悟りリテラシー」の全体像を共有することを

主目的としているので、いわゆる悟りの応用ハウツー的な知識を具体的に述べてきたものではありません。

それでは観念知識で結局役に立たないではないか、と、ここまで読んで思われた方がもしもいたとすれば、もう少し俯瞰したところから、今からの時代状況の中の「悟りの智慧」の全体概念を得ることの意味を、もう一度考えてみて頂きたい思います。

そもそも何らかの智慧の活用とは、基本的に、その智慧を活かす対象となる「問題や問題意識」とペアになって、はじめて具体的な意味と力を発揮するものです。

ですから基本的に本書の内容も、自分の問題意識として繋がるどころ、咀嚼して吸収したところを意識して、具体的な業務やテーマと繋げて考えてみる必要があります。

そうしてようやく深く「自分ごと」となり、現実に接続した智慧としての意味を持つものになるからです。

実際には、それは本書の内容外の応用的な気づきや学び、実践のための整理も必要となる

ことなので、また別の機会になんらかの形でまとめてみたいと思います。

また、現実社会、とりわけコロナ禍以降の経済情勢の中での企業活動は、本書で扱ってきた本質的な概念だけでなく、もちろんその時々々の情報や状況の変化に即応した、様々な知識や手法、実務が必要になると思います。

ただ、それらはある意味、従来からの会社組織の学びや業務範囲、経営指針として、これまでも既にあつたものでしょう。時代的な状況が厳しさを増しているとしても、会社経営にあつての必要な枠組みとして、根本的なパラダイム自体は変わってはいません。

しかし、冒頭のアメリカの現状やテイルの項で触れた内容が象徴するように、経営者の意識、メンバーの意識、組織のシステムや関係性のあり方など、新たなパラダイムの扉を開こうとする潮流は今、確実に生まれています。

その新たなパラダイムは、実際にはトップである経営者の意識変容なしには起こりえません。

そして、この潮流の全体像を俯瞰して掴む上で、おそらく最も有用で必要な知恵が「悟り」となるであろうという見立てから、経営者が「悟りリテラシー」を高めるための一助になることを願ひ、本書の内容を構想したものです。

ですから本書を一つの土台、参照材料として、これからの時流や新たなパラダイムの行く先を考える上で何らかお役に立てて頂ければ、著者としてはたいへん嬉しく、有り難く思います。

二つ目は、資本主義社会の「市場」に入って（入麿）、そこで悟りの智慧をどう応用できるか、ということを考えるとき、本質論と現実を結ぶ最もシンプルかつ大切な最初のキーワードが、「意志決定能力」ということです。

経営者は組織のリーダーですので、さまざまな局面における最終の意志決定権をもち、船の舵取りの責任を担います。

コロナ禍によってさらに加速するVUCA時代の荒波の航海においては、意志決定の

重要度がさらに増してきていると思います。その中で、悟りの智慧を羅針盤として自己の現  
状を鑑み、意志決定能力を進化させることは、大きな意義を持ちえるでしょう。

自由意志と現象の関係についてはそれだけでまた一冊の本が必要なテーマになるので、  
本書ではこれ以上の内容には言及しません。

一点だけ付言しておくなら、意志を通す「間」が目詰まりを起こしていると、それは現実  
化しにくくなる、ということがあります。

それは第三章で少し触れたように、自分の無意識だったり、マインドブロックだったり、  
カルマだったり、霊的なものだったり、いろいろ考えられます。

それらすべての四次元世界の時空間の中から自在になったところから、スッと主体的意  
志の「間」を宇宙に律動させることが、高度に抽象的ではあるにせよ、最も大事な概念にな  
ります、ということです。

#### ◇企業活動は「関係性の悟り」を深める最高の場

そして三つ目は、個人と集団共同体の最たる違いである、「関係性」についてです。

わかりやすく対比すると、「個の悟り」を探究するに当たっては、基本的に、現象世界の中  
で他者との関係性をほとんど必要としません。

むしろ、ひたすらに自己の内面に入り、いわゆる自分のウェルビーイングを最上の状態に  
まで持っていくこと、そして悟りを得ることがゴールである、としまししょう。

そのためには、自分の心の妨げとなる他者や、周囲の煩わしい問題や環境から離れた方が効  
率です。

ですから現実世界を離れて出家することになり、資本主義社会の経済活動の現場である  
「市場」からは、最も離れた場所に位置することになるのです。

もちろん個人が悟りを探求する中での様々な方法論や智慧は、その過程であれその後で

あれ、様々にアレンジして世の中に役立てることはできませんし、実際そういう方もたくさんいると思います。

その一方、企業活動の現場においては毎日、社会や経済状況の変化、会社の経営状態、キヤッシュフローの状態、社員のモチベーションや顧客、取引先との関係、自分の実務などにどこに囲まれ、ゆつくりとした心で宇宙の根源などに意識を向けている暇はないと思います。

しかしその状況を逆に好機と捉えてみれば、「入麩」の中での悟りの深め方や活かし方の醍醐味というものを楽しむことができますと思います。

それは総じて言えば、悟りリテラシーを土台として現実社会で「関係性の悟り」を深めるための、最高の場である、ということになります。

経営仲間、社員スタッフ、お客さん、取引先、お金、世の中の情報、社会の状況、世界の状況など、自分と繋がるあらゆる「関係性」の中で生起する「出来事」に対して、自分がどう向き合うか、何を学ぶか、どんな意志決定によって局面を転換させ、新たな方向性、新たな

な宇宙を創造するか、という視点で見れば、事業経営は日々、瞬間瞬間の自らの意志の蓄積体、集合体のようなものです。

絶えず現象的な問題、課題が押し寄せて逃げられないからこそ、それを道具として自己認識を深めたり、自分のエゴに気が付いたり、自分の無意識を意識化したり、自分の天命を見つめたり、自分や自社の存在意義を内省したりすることに、真正面から取り組みざるをえなくなります。

そういった外の現象を常に反転させて本質からの問いを自分の内に投げかける習慣を持つてみれば、毎日のあらゆる「出来事」が、悟りの智慧を高めるために自分の前に現れてくれた問題集のようなものになります。

その問題集に向き合い、解き続けていくことで、「経営者の悟道」というものが深まっていくのではないかと思うのです。

実業の中で自己を知り、自我を超え、自他一如のあり方の大切さを知る。人間の本性（ほ

んせい)や世の中の様々な理(ことわり)を思索し、掴み、自分の心を真円に磨きながら、自らの意志が現実宇宙を創造することの本義を悟っていく。

私自身もこれまで実社会の中で十数年こういったことに取り組み、今は経営者のはしくれですが、実際には、様々な「関係性」の中での「出来事」に直面し続ける中で、その時々には上手くいかなかったり失敗したことも数え切れないほどあります。

対人関係、商品展開、プロジェクト・事業の不調、売り上げの不調、投資の失敗など、それだけ見れば、とてもこんな内容の本を世の経営者の方々に広く問えるほどの資格はないとも言えるでしょう。

けれども私がそういった「出来事」とその時々「関係性」の中で悟りの智慧を深めたり活かしたりしてきた経緯は紛れもない真実で、その価値と意義に関しては、完全に揺るがない、素のままの確信となっています。

だからこそ、この時代にあつて「悟りリテラシー」を経営者が有することの意義を改めて

感じ、こういった本を通して世の中にそういう機運が広がることを、心から願っている次第です。

#### ◇公心(おおやげごころ)と経世済民の砦

コロナ以後の時代の激変期にあつて、日本と世界の行く末は、全く先が見通せない状態が続いています。

フェイクとファクトがないまぜになっている世界秩序も混乱と混迷を深め、政治やメディアのあり方も、これから根本的にさらに大きく問われ、今までとは違う様相を生み出していくことになるでしょう。

また、ひと頃ほどは喧伝されなくなったシンギュラリティ問題と連動して、絶えざる技術の進歩が人間社会にどんな影響を及ぼすのか、人間の真の幸福にどれほど寄与するのか、人

と科学技術の未来もまた、大きな霧に包まれています。

「近代理性の人間中心主義」という思考の延長上に、合理性や効率性の極限としてのポストヒューマンの未来を描く「超越の道」もまた、語るべき深い哲学が追いついていない感があります。

世界の先端企業と先端産業がひた走る技術の未来が、国家の権能を超えたデジタル全体主義、テクノディストピア世界をもたらすのか、あるいは人間の本性と深く調和した素晴らしい新時代を招来するのかも、予断を許さない状況が続いていくでしょう。

しかしまた、今後の時代がどうあれ、私たち人間が生きている限り、経済活動というものは永遠になくてはならないものです。

たとえばベーシックインカムが真に理想的な形で制度化されたとしても、今の資本主義社会と貨幣制度からは想像もつかない社会経済システムができたとしても、あらゆる財やサービスを生産し、循環させる経済活動は、この地球上からなくなることはありません。

コロナ禍で経済不況が厳しさを増していくとき、被雇用者の立場の人ももちろん大変ながら、最も厳しい現実を突きつけられ、苦渋の判断を迫られるのは、経営者の方々だと思います。

それが個人事業主や一人会社であれ、零細、中小、大企業であれ、時代状況の中で事業の行く末に直接責任を負う立場にある人々の判断と意志決定が、社会を左右していきます。

いまこの時代、日本において、政治とメディアの未来にどれほどの人が期待を寄せているのかはわかりません。

本来なら、社会の平和と幸福、繁栄のために最たる意志決定権力を持つ政治と、社会の空気を醸成するメディアが、公共の責務を果たしうることを期待すべきですが、特にコロナ以後のこの一年間の現実社会の推移を鑑みると、私は甘い期待は抱かない方が良いでしょう。

むしろ逆に、現象的なこの時代の難局をいかに反転させ、ピンチをチャンスに転換するか

という発想で、この壮大な文明史的転換期を乗り越えんとする草莽の意志の共創が、これからとても大切になってくるのではないかと思います。

またもし、身近に素晴らしい志を持った政治家がいたとしても、真実に世界に伝えるべきメディアの使命を全うしようとする人がいたとしても、その活動の基盤のためにも、やはり経済の論理、お金の論理というものは避けて通れません。

そういったもろもろのことを含み考えて、あらゆる経済産業活動の中枢に位置する経営者たちの悟道が、これからの時代を生き抜き、素晴らしい未来を次世代に残す上で、一つの希望の灯火になると思うのです。

「経済」とはもともと、**経世済民。「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」という原義**があります。

それは「私心（わたくしごころ）」を前提にしたものではなく、「私心」も包み込みながら、どこまでも大きな心で統べる「**公心（おおやげごころ）**」のあり方を確たる中心とすること

で、はじめて成し得る理念だと思えます。

この複雑な時代にあつて、様々な立場の「私」と「私」とを大きく包み、対立や優劣ではなく共生共栄の「結び」を起こし、個と全体の繁栄をもたらすための最善の智慧は、やはり悟りの泉から汲み取ることが最も賢明な道であると、私は思うのです。

日本においてそれは、一四〇〇年前に聖徳太子が「**達（さと）れるもの少なし**」と憲法の第一条で明言し、しかしだからこそ、「私」に争わず「**和を以て貴し**」とせよ、と謳った日本の基層精神の、現代的な継承と位置付けられるかもしれませぬ。

現代社会において文字通り「**経世済民の砦**」を担う世の経営者の方々が、悟りの「**公心**」を以て新たな日本の未来を創成するために、本書がささやかなりとお役に立つことを願いつつ、本章の締めとさせていただきます。



## おわりに・凡夫の心

本書を最後まで読んで頂き、どうもありがとうございました。

情報過剰のこの時代、世に数多ある書籍の中からこの本を選び、ご縁をいただき、こうして最後までお読みいただいたことに、心から感謝いたします。

悟りの智慧の全体像をリテラシーとして共有する、という本書の試みがどこまで成功したかは、読者の皆様のご判断に委ねるほかありません。

巻末に著者本人のメールアドレスも添付しておきますので、ご意見、ご感想などありましたら、忌憚なく頂戴できれば大変ありがたく思います。

本書の中では十分に扱いきれなかった悟りの智慧の具体的な応用テーマについては、ま

た別の機会に、次に構想している書籍をはじめ、さまざまな方法でお伝えできればと思っています。

悟りの智慧は抽象的で掴みにくいところ、現実社会との接続がよく分からないところがあるかとも思いますが、一方で、その汎用性は無限大といって良いほどの可能性を持っています。

悟りという言葉と近いものとして、あまねく宇宙に満ちるこの根源的な叡智を「真理」と呼ぶならば、「真理」はあらゆるものに息づき、あらゆるものの生成化育をより豊かなものとするために、常に「今、ここにあるもの」だと思えます。

無意識の呼吸、心臓の鼓動、細胞の生成、神経の発火。自然の巡り、地球の回転、天体の運行、宇宙の膨張。絶え間ないあらゆる「動き」の中に、真理は常に「今、ここ」あります。

それと繋がり、人と世の中が喜びと微笑みに満ちたものになるよう、悟りの泉から智慧を

汲み取ることに、ぜひ意識を向けてみて下さい。

とはいえかくいう私も、その無尽の智慧を十分に日々の暮らしや人生に活かしているのかといえば、甚だ心もとない点も、みつともない失敗をすることも、多々あります。

こういうことに関心を持ち、それを深め、応用してきた中でも、その時の現象としては上手いかなかったこと、人にご迷惑をかけたことも、数えきれません。

しかしその過程の中でこそその気づきや学びは、本書のリテラシーを土台にこれから悟りの社会実装に向かう中で、ささやかながらもお役に立てる先例になっています。

私は悟りの智慧の社会実装ということを日本で、ともすれば歴史上で初めて公に宣言し、実社会において実践したリーダーは、聖徳太子ではないかと考えています。

神道、仏教、儒教などの叡智を融合させた皇族政治家としての太子の理念は、十七条憲法をはじめ、具体的に実社会の様々な制度や組織経営の中に反映されました。

日本国という国家組織の運営、経営にあたるトップリーダーだったわけですが、今もって日本の国柄に対して、誰もが「和」という言葉を連想するのは、太子の遺産といっても良いかもしれません。

その太子は、十七条憲法の第十条で、次のような言葉を残しています。

「人みな心あり、心おのおの執（と）るところあり」

「われ必ず聖なるにあらず、彼必ず愚なるにあらず。共にこれ凡夫のみ。是非の理なんぞ善く定むべき。」

そしてお互いが凡夫だからこそ、いつも自省しつつ、ひとりよがりにならず、共に歩みなさい、と。

本書ですっと「悟りの智慧」ということを扱ってきましたが、それは別にご大層にまつりあげるものでもなく、特段に尊いものとするのでもなく、もっと自然に、もっと自在に、自

分の心に深く静かに息づいていれば良いものではないかと思えます。

ですから「凡夫の心」でもって、世の中に悟りの智慧を役立て、未来世代により良い社会を残せるよう、本書をきっかけとしたご縁を深めさせていただければ、これに過ぎる喜びはありません。

これから色々と情報発信の仕組みも整えようと思っておりますが、まずは無料のメールマガジンで何かしらお役に立つ情報をつれづれに配信して行こうと思っておりますので、よろしければこちらからぜひ登録しておいて下さい。

<http://lonsdaleite.co.jp>

最後に、本書の執筆に至るまで、多くの先達、多くの仲間から、素晴らしい学びや気づき、体験、経験を頂いてきました。

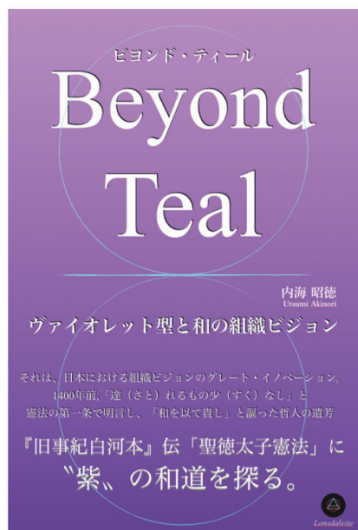
私の人生の中で、そのすべての過程なくして、本書をこうしてまとめることはできませんでした。

ここで名前はあげませんが、ご縁をいただいたお一人お一人に、心から感謝いたします。そして、本書をまずは基本のリテラシーとして、大転換の時代に新たな道を開いていく歩みを、ご縁の中でしっかりと進めて行くことで、私なりのご恩返しができると思います。

どんな苦境も乗り越え、歴史を前に進めてきた人間の真なる強さを確信しながら、「コロナ以後」の新時代を、日本で、日本から、開いてまいります。

## 「ヴァイオレット組織」への必読書。 本書姉妹本、好評発売！！

和の真智が開く、ヴァイオレット・ステージ



序章  
ヴァイオレットへ  
意識の射程範囲の拡張を

第1章  
日本のエートス「和の精神」の  
アップデートへ向けて

第2章  
『旧事紀白河本』から新たに観る  
聖徳太子の実像と「神教経」

第3章  
「経典本紀 憲法」と  
ヴァイオレット型の組織ビジョン

第4章  
組織変容は意識変容から  
ヴァイオレット型応用十七項

第5章  
「ヴァイオレット組織」探求・実践  
のための「5つのさとり」

『ビヨンド・ティール -Beyond Teal-』

内海昭徳 著

定価：1700円 株式会社ロンズデーライト

**内海昭徳 (Utsumi Akinori)**

株式会社ロンズデーライト代表取締役

neten 株式会社客員研究員

天籟株式会社 取締役副社長兼 CLO (Chief Learning Officer)

筑波大学で国際関係学、京都大学大学院で政治哲学・社会経済学を専攻。

9.11 テロを機に、人間の根本的な意識進化の必要性を感じ、大学院を中退。

世界の真相と人間の意識の本質の探求を深める中で、メタ認識次元の叡智を掴み、科学と悟りの知恵を融合した人間開発と社会変革に長年取り組む。

北米への事業の新規展開を担う過程で、2018 年サンフランシスコで開催された wisdom2.0 に日本人初のエントリースピーカーとして登壇。

シリコンバレーを中心に、テクノロジーの進歩と並走できる宇宙の普遍的真理の社会実装ニーズの高まりを予見し、独立。

コンサルティングや組織研修、講演会、リトリート、ワークショップなど様々に取り組んでいる。

無料メルマガ:「善く生きる」ためのリテラシー、下記 web ページより登録、好評配信中。  
<http://lonsdaleite.co.jp>

\*各種の勉強会、講演、研修などのお問い合わせは、下記メールアドレス宛にどうぞお気軽にご連絡ください。また各分野の方との合同企画、共同開催なども取り組んでおりますので、「共創の時代」をご一緒できたらと思います。

著者本人へのメッセージ、ご感想などもこちらに直接お寄せ下さい。

[aki@lonsdaleite.co.jp](mailto:aki@lonsdaleite.co.jp)

**経営者のための悟りリテラシー講座**

悟りの智慧の社会実装の時代へ

2021 年 1 月 20 日 電子書籍版初版発行

2021 年 11 月 3 日 紙書籍版初版発行

2021 年 12 月 12 日 紙書籍版第 2 刷発行

著者 内海昭徳

発行所 株式会社ロンズデーライト

〒107-0062 東京都港区南青山 2-2-15 ウィン青山 942

URL <http://lonsdaleite.co.jp>

メール [aki@lonsdaleite.co.jp](mailto:aki@lonsdaleite.co.jp)

Copyright (C) Lonsdaleite, Inc. All Rights Reserved.

本書の無断複写 (コピー) は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

ISBN: 9798751091811

Proof